



TITLE:

徳と効用のあいだ ーフランス革命期における科学と芸術ー

AUTHOR(S):

富永, 茂樹

CITATION:

富永, 茂樹. 徳と効用のあいだ ーフランス革命期における科学と芸術ー. 人文學報 1992, 70: 59-94

ISSUE DATE:

1992-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48377>

RIGHT:

徳と効用のあいだ

——フランス革命期における科学と芸術——

富 永 茂 樹

- I 社会の再生，知識の再生：1790—93年
- II 徳と効用：戦争への対応
- III 理性の徹底：知識から祭典へ
- IV ロマン主義への道：テルミドール以後

科学と芸術，いや当時の言葉の使われかたに忠実であろうとすれば，学問と技芸というべきだろうが，フランス革命期におけるこのふたつのものの位置については，基本的にはあい対立する説が従来から繰り返されてきた。つまり一方で，これはテルミドールの反動の直後からすでに登場してくるのだが，革命期とりわけジャコバン独裁の時期には，野蛮と無知が横行し，文化にたいする破壊行為と知識人にたいする迫害が組織的に展開されたという，いわゆる《ヴァンドリスム》にかかわる議論がある。だがこの議論は，ヴァンドリスムという新語がこのときに造られたこと自体から容易に想像できるとおり，またこれをバチコが「テルミドール派の言説」と規定することで明らかにしたように¹⁾，今しがた打倒したばかりのロベスピエール派を攻撃することでもって，自分たちの立場の正当であることを示そうとするか，あるいはのちの時代に受け継がれた場合には，フランス革命にたいする敵意ないし嫌悪を表明する意図のもとで述べられるか，いずれにせよ多分に政治イデオロギーに汚染された言説を構成するものにほかならない。他方で，そうした議論にはたえず弁明ないし反駁が加えられて，破壊や迫害といった行為は存在しなかった，あるいは存在したとしても，それはジャコバン派が意図的かつ組織的に行なったのではなしに，革命そして戦争という非常事態のなかでやむなく生じたのであるとされ，さらには，知識人は迫害を受けたどころか，むしろ革命の遂行とりわけ対外戦争の勝利にとって，大きな役割を果たしたという議論さえなされる。この最後の議論の代表的な例は，マティエの論文「共和暦2年の知識人の動員」にみることができるが²⁾，これまたテルミドール派の言説と同様に，ある種のイデオロギーからけっして自由でありえないことは，その著者の名前からして，また書かれたのが1917年であることからして，十分に理解ができるはずである。

ふたつの主張のいずれが事実について正しいのかを問うことには，ほとんど意味がないだろう。なぜならどちらの言説も，なんら事実を語ってはいないからである。ひとつの党派の正当

化と、その対になる他の党派にたいする攻撃をとおして見えてくるものや、そのあいだにあっての状況による事態の説明をとおして語られるものはさほど多くはない。だが、それでは事実はどうであったのかというと、たしかに迫害や破壊行為と見なすべきことがらがこの時期に頻出したのは認めなくてはならないけれども、それは必ずしも意図的なものではなく、ましてや組織的と呼べるほどのものでもなかったものであり、他方で知識人とりわけ自然科学者が革命期の行政に深く関与し、また社会における科学者の位置がフランス革命の過程をとおして大きな変貌を遂げたのも否定はできないという、ごく凡庸な結論、ヴァンダリズム論と動員論とをいわば折衷する結論しか導きだせないだろう。われわれのここでの目的は、しかし、フランス革命期における知識と知識人にかんする事実命題の抽出ではない。この事実にくまれる矛盾、すなわち18世紀の啓蒙思想から出発したはずのフランス革命が、全面的にはないにせよ、文化の破壊という啓蒙の理念に背馳する結果をもたらしたという、その過程こそを問う必要があるのではないだろうか。たとえば具体的には、自然科学が社会的に有用であることについて、かなりの範囲で認識が共有され、しかもその認識が革命の展開するなかで現実化しつつありながら、それにもかかわらず、当時の自然科学の進歩の象徴ともいべきラヴォアジエが逮捕され処刑されるにいたったのはなぜなのか。論争史の簡明な整理や単純な事実の把握を超えて、知識と社会秩序にかんしてこの時期に賭けられたものをこそ見いだし、その重さを計測しなくてはならないのだ³⁾。

フランス革命の前後の数十年間をつうじて、知識と社会秩序とはきわめて深いところで相互に関与しあう。すなわち、工業化にともなう新たな社会の編成において、知識は大きな役割を果たすとともに、その同じ社会のなかにおいてそれ自体が変容し、これまでにはみられなかったかたちで制度化されてゆく。しかも、こうした社会と知識の二重の作用は、革命という激しく揺れ動く状況に直面することによって、ときにいちじるしい歪曲やまた逸脱を経験したが、しかし逆に、変化が緩慢であればかえって捕捉が困難であっただろう、いくつかの本質的な問題を露呈させることにもなった。しかもこの傾向はとりわけジャコバン独裁期にいっそう顕著なものとなる。それが、この時期の社会における科学と芸術の占めた位置に注目しようとする理由にほかならない。われわれは以下で、とりわけヴァンダリズム論の対象となるジャコバン独裁期を中心にすえて、問題を検討することになるが、しかし同時に、旧体制と19世紀という、フランス革命の前後に存在する社会との連続・非連続面をも多少は明らかにしてゆきたい。そうすることではじめて、知識と社会のあいだの力動の把握が可能になるはずである。

ところで、科学的な知識が社会においてもちうる価値とは、第一義的には、人間が外部の世界に働きかけるうえで有効な道具となりうるという点に求められる。他方で芸術の本来の機能は、自己表現に適切な形式を与えるところにあり、そのかぎりにおいて、その社会的な価値は必ずしも道具としての有効性と一致するわけではない。芸術と科学とは、文化全体のなかでそ

れぞれ別種の下属体系を構成している⁴⁾。だが当時においては、《sciences》が科学と呼ぶよりはむしろ諸学問一般をさしたのと同様に、《arts》という語のなかで芸術と技術は未分化なままの状態にあった。それぞれの言葉の意味内容が分解し変容しはじめるのが、まさにこの時期なのであり、ふたつの語は組み合わせられることで、長いあいだ人間の知識の総体に対応していたのだった。「さまざまな存在とシンボルについて、その本性、効用、用途、諸特性を観察することがまずはじめに行なわれた。ついで科学とか技術、あるいは一般的に学問という名が、この観察の結果を集めた中枢すなわち集積点に与えられた⁵⁾」と述べる『百科全書』が、科学的知識のみならず芸術＝技術にたいしても有用であることを要求したのは、ごく当然なことであつた。それ以後18世紀の後半をつうじて、科学についても芸術についても、知識のもつ社会的に有用な性格はいたるところで強調され、それは伝統的なアカデミーに保存されるにとどまる知識を批判する根拠ともなりえていた。そしてフランス革命もまた、その文化政策の展開において、この価値をまずは継承するであろう。

知識が有効な道具＝手段であるという観点は、しかし、その手段をつうじて実現すべき目的の存在を前提としている。ここで目的は、理論的にはふたつに区分することができるだろう。すなわち一方での現実の問題への対処と、他方での理想の実現とである。たとえば、1790年から度量衡の制度の改革が構想されるとき、改革の最大の根拠のひとつは、旧制度における単位の不統一が商業その他にもたらしていた混乱と不正の解消であり、自然科学に知識に依拠した普遍的な制度の確立は、現実の問題として要請されたのだつた。93年の8月になって新制度が公布されたときにも、この要請は姿を消すわけではないが、しかし、それ以上に「共和国の団結を強固にする新たな手段であり、共和国にたいするいっそうの尊敬を表明するもの」であるという認識が加えられるであろう⁶⁾。ここでは目的は現実を離れて、共和国という抽象的な理念の側に位置を移すことになる。絵画や記念碑を祖国愛や革命精神の喚起のために動員するという、いわゆる《プロパガンダとしての芸術》の観念は、先の芸術をひとつの有用な道具とみるところから発しているが、この場合にも芸術は理想の実現のために用いられるのであって、なにか現実の紛争の解決のためではけっしてない。度量衡の統一の例からもわかるとおり、同一の手段がふたつ以上の目的に導かれることがあるので、単純に判断するのは困難ではあるけれども、それでも理想の実現と現実への対応とは、基本的にはことなる性質の、しかも最終的には対立し排除しあうものとして、明確に区別しておく必要がある。なぜなら、後者をめざす行為における知識の有効性は、それ自体で完結した現実世界のなかで評価が可能であるのにたいして、前者にあつてはさらに理想にどれだけ近づいているか、あるいは価値がどれだけ一貫しているかという、別種の評価規準が付加されるからである⁷⁾。93年の夏以降に知識人の《動員》をしだいに支配するようになるのは、この価値の一貫性という規準のほうであり、それはひとことでいえば《徳》の観念でもって代表されるだろう。

ジャコバン独裁期の文化政策は、この効用と徳、あるいは理想（超越）と現実（内在）また手段としての有効性と価値の一貫性という、対立する行為規準のあいだで大きく揺れ動き、そこからさまざまな問題も生じてくる。だが、このふたつのものは対立すると同時に、ある面では共通した性格をもっている。理想も効用もともに個別の共同体の拘束とはかかわりなく、あるいはそれを超えて、広く人間一般に通用するものであり、普遍的な世界で展開されることが含意されているからである。徳の共和国に到達するには、個別意志は一般意志に譲歩しなければならないと、ロベスピエールが考えていたことを思い出すべきであろう。またその内容を別にすれば、公教育の制度や美術館は国民全体を対象とするものであって、特定の個人にかぎって独占される性質のものではなかった。度量衡の新制度にしても、同様に世界全体に向けて創出されたものであった。ところが、テルミドールの反動を経て革命の理念が後退してゆくなかで、否定されるのはロベスピエールのかかげた徳の理念ばかりではなく、普遍的な世界への意思そのものが失墜してしまうかにみえる。時代の関心はむしろ個別性の強調に向かい、科学や芸術が有用であるとする認識それ自体は保持されるとはいえ、知識にかかわる個人とその天分が強調され（その変化は、たとえば知識人にたいする奨励政策に明らかに現われる）、教育についても天分の持ち主である人物つまりエリートの育成に力点が移り（理工科学校などの設立）、美術館では天分の所産の保存が、作品の展示による教育に取ってかわることとなり、さらには中世以来の国民の歴史的記念物を保存し陳列する美術館さえ登場してくる。ここで《国民》の観念は、おそらく普遍的な理念の次元で共和国が体現していたものに、個別の世界において対応するものである。こうして、社会のたえざる進歩をめざすと同時に個人の独自性を崇拝しつつつづける19世紀、文学のみならずあらゆる領域においてロマン主義の支配する19世紀が、しだいにそのかたちをみせてくるのだ。理想と現実、普遍と個別——このふたつの参照軸を設定して、フランス革命期の科学と芸術の位置と役割、広くはこの時期の知識と社会のありようを検討すること、これが以下でわれわれに課せられる作業なのである。

- 1) B. Bacsko, *Comment sortir de la terreur: Thermidor et la Révolution*, Paris, 1989.
- 2) A. Mathiez, La mobilisation des savants de l'an II, in *Revue de Paris*, 1er décembre 1917.
- 3) 筆者は先に、ブリュール・ド・ラ・コート＝ドールというひとりの人物の革命期における行動の軌跡をととして、同様の問題の考察を試みたことがある。「知識と社会秩序—フランス革命期の一技術将校の肖像」（『講座・転換期における人間・7 技術とは』岩波書店、1990年所収）をあわせて参照されたい。
- 4) 文化の下属体系の分類と意味づけについては、作田啓一『価値の社会学』（岩波書店、1972年）69ページ以下を参照。
- 5) 百科全書「技術 arts」（桑原武夫編『百科全書・序論および代表項目』岩波文庫、1971年）。
- 6) Talleyrand, *Proposition sur les poids et mesures*, Paris, 1790. pp. 3-4. およびアルボガスト「度量衡の統一にかんする報告」（河野健二編『資料 フランス革命』岩波書店、1989年、443ページ）。
- 7) 行為を導く規準としての《手段としての有効性》と《価値の一貫性》との区別については、作田

前掲書 3－5 ページをみよ。

I 社会の再生，知識の再生：1790－93年

革命議会がはじめて科学と芸術の問題を採りあげたのは、1790年の夏、財政一般にかんする討議においてであった。立憲議会が当時かかわっていた問題全体の大きさからすれば、国王の図書館や諸アカデミーにたいする支出という主題は、おそらくごく些細な議題にすぎず、9月のはじめまで断続的になされた討議の結論もまた、現状をほぼ維持しながら問題を先送りにする、つまりアカデミーの制度の改革や新しい文化政策の画定にまではとてもおよばない、きわめて平凡な内容のものであった。しかし、のちに科学と芸術をめぐる展開される論議の中心を占めることがらのほとんどが、ここですでに登場してきている点で、さらにまた議会の外にあったマラーが『人民の友』でこの問題にかんする記事をいくつも書き、やがて91年になってパンフレット『アカデミーのまやかしかんする書簡』を公刊するであろう、そのきっかけとなった点でも、このときの立憲議会で文化の問題が議論されたことの意義はけっして小さくはない。

アカデミーや図書館など個別の案件についてそれぞれの提案を行ない、討議を主導したのはルブランだった。このときフランスのおかれていた財政状況では、学問・技艺にたいして充分な支出を行なうだけの余裕があったとはいえない。それでも彼は、そうした支出の意義を全面的に否定するわけではない。そしてルブランにとって、学問・技艺の奨励の意義は、それがフランス国民の利益および《栄光》につながっているというところにあった。「われわれの習俗が磨かれるのは文芸をとおしてであり、文芸が尊敬もされず報いもされないとき、国民は野蛮に、あらゆる悪徳にいたりつくだろう¹⁾」と彼は述べる。これにたいして、ルブラン以上に積極的な奨励策を主張する議員は、支出は「知識＝啓蒙と諸芸の完成」を目的としていると論じて、ここで奨励の意義に微妙なくいちがいを認めることができるだろう。すなわち国民の栄光と啓蒙の完成とのいずれをめざすのかという、芸術家の奨励や美術品の保存をめぐる、いづれあらためて明確に分岐することになる論点が、まだほとんど自覚されないままではあるが、姿を現わしてきているのである。しかし、こうした差異にもまして重要なのは、ランジュイネがアカデミーにかんして示した見解だった。「諸アカデミーまたその他の文芸団体は自由であり、特権をもってはならない。なんらかの保護のもとでそれらの形成を認可するならば、真のジュランドをつくることになるだろう。特権をもつアカデミーはつねに文芸のアリстокラシーとなる」として、彼はアカデミーへの支出に反対するのである。おそらくは辞書の編纂のことをいっているのだろうが、政府が支出する事業の進捗は緩慢なものでしかなかったが、民間の手で進められた『百科全書』の場合はどうであったか、とランジュイネは論じる。これに

たいしてはグレゴワールが即座に「アカデミーの有用であることは認識されている」と反論し、結局は各アカデミーが組織の改革案を提出することを条件に、支出は承認されることとなるのだが、こうした一連の議論に反応し、それを増幅させたのがマラーである。

「文芸アカデミー、さらにアカデミー・フランセーズはただ奢侈の制度でしかない、どうして国民がその負担をしなくてはならないのか。後者は完全に無駄であると付け加えておこう」と、マラーは8月17日付の『人民の友』で、議会の討論の内容を紹介しながら書いている。それにくらべるなら、科学アカデミーはまだしも有用な性格をもっていた。いかなる身分の者もそれなしにはすまずことのできない知識がそこには集積されているからだ。だがその科学アカデミーも、旧体制においては「つねに信用を悪用し、ときには権威を悪用して、自分たちの名声を覆うような目立った発見を圧殺し、その発見者を迫害してきた。新体制下にあっても、権威ではないが、依然として団体に都合のよい偏見を悪用して、アカデミーは知識の進歩を妨げている²⁾。」これ以後のマラーのアカデミーにたいする執拗な攻撃が、品がよいとはけっしていえない、きわめて粗野な言説をつうじて展開されていることは否定できない。1770年代以来自然科学とりわけ光学の研究によって、科学アカデミーへの入会を望みながら、たえず拒絶されつづけてきたという、彼自身の経歴に由来する《怨恨》をそこにみてとることもたやすいだろう。だが、それでも、ランジュイネとともにアカデミーを特権的な団体と見なし、それを前年の封建制の廃止から翌年のル・シャプリエ法の成立にいたるまでの、ひとつづきの文脈のなかで問題を捕捉している点は重要である。マラーのみるところでは、科学や芸術そのものが無意味なものなのではなくして、伝統に依拠した特権的な団体であるがゆえに、アカデミーは攻撃されねばならなかった。彼らの批判の対象は、ロジャー・ハーンも明記しているように、アカデミーという集団であって、自然科学それ自体ではなかったのである³⁾。

学問・技芸にたいする奨励の問題については、したがって、マラーもけっして異議を唱えはしないだろう。このときの国民議会の議事録にはみあたらないのだが、ある議員が「国民は詩人を必要とはしていない、必要なのは農民であり、家庭の父親であり愛国者である」という、のちに革命裁判所の裁判長がラヴォワジエの裁判のさいに述べたとされ、ヴァンドリスムの象徴にさえる言葉を想起させるような発言を行なったと語り、マラーはこの議員を揶揄しながら、学問とりわけ自然科学の社会的な意義について論じている。科学や芸術は、社会にとって有用であるかぎりにおいて、なんらかの奨励を受けて当然である。ところでマラーによれば、過去においてあらゆる科学の発明、あらゆるすぐれた芸術作品の制作は、怠惰かつ無意味な人間からなる集団ではなくして、単独の個人の手をとおしてなされるのがつねであった。アカデミーが廃止されても、それは学問・技芸の完成にとっていささかも障碍とはならないどころか、むしろいっそうの進歩をもたらすだろう。「科学と文芸の利益のためには、もはやフランスからアカデミーの団体をなくすことが重要である。文芸および科学に携わる者の奨励は欠くこと

ができない。しかしながらはっきり見分けてでなくてはならない」というのがこの論説の結論であった。つまり、集団の内部に埋没した知識人のうちから才能の持ち主を選び出すこと、またその才能が社会にとって有用であるかどうかを判定することをマラーは提案する。科学であれ芸術であれ、総じて知的営為をになう主体が集団ではなく個人であること、これは社会全体の編成の問題にもかかわる、18世紀の大きな発見のひとつである。議会内のランジュイネと議会の外部のマラーはともに、単にアカデミーを解体するかどうかの議論にはとどまらない、より広い射程のなかで、学問・技芸の問題に抵触していたのだった。こうして、いわば《知識の個人主義》の立場からのアカデミー批判がはじまり、それは1793年8月のアカデミーの閉鎖までつづけられることになる。

90年夏の議論は、結局のところほぼ従来とおりの文化支出が認められて終了する。ここでは新しい文化政策が打ち出されたわけではなかった。憲法の制定をはじめとして、急ぎ進めるべき課題は多く、議会はまだ文化の問題を革命の枠のなかで取りあげるだけの余裕をもってはいなかったのだろう。だが、体制の根幹にかんして処理しなければならないことがらが、その後すぐに浮上してくる。91年憲法の骨格がつくられてゆくにつれて、「法律によってしか統治しない」国王に帰すべき財産の整理が問題となるが、これについて91年5月26日に議会で報告を行なったバレールは、ルーヴル宮とテュイルリー宮とを国王の住居にあてるとともに、しかしそれらが「国民の宮殿」であるかぎりにおいて、国王とその家族に独占されるべきものではなく、そこに集められた芸術作品を広く国民に公開することによって、「公教育の主要施設」としても役立つことを提案し、さらに8月にはこのルーヴルで隔年に開催されるサロンへの出展に制限をもうけず、芸術家の自由な参加を認める法令を可決させている⁴⁾。このふたつの報告は、革命期における美術（館）行政の出発点であると同時に、やがてモンターニュ派の指導者のひとりとなる人物の、この時点での知識観を明確に示してくれる言説でもある。

バレールによれば「かつてひとの想像力により強く訴えかけるために、神が神殿や森の奥に安置されたのと同じく、遠く離れた宮殿のなかに、アジア的な奢侈のなかに閉じこもるのが、専制政治の秘密であり必要とするものであった。」だが、今や革命がなされたのであり、その結果専制政治は打破されて、国王はパリへ、民衆のただなかへ戻ってきた。国王の住居は国民全体のものであり、国民の宮殿であるルーヴル宮、これまでも「学問、文学および技芸の劇場」をなしていたルーヴル宮は広く国民に開放されなくてはならない。そこにはまた、いずれかつての国王の図書館も移転されて、国民の威光を示すものとなるであろう。これらの宮殿を修復するとすれば、それは「立憲君主」にたいしてフランス国民にふさわしい住居を与えるためであるとともに、そこを「高名な美術館」とするためでもある。ルーヴル宮を公開し、教育の普及・啓蒙の拡大の手段とすることは、革命の理念それ自体と切り離しえないことがらであった。というのも、「野蛮な民衆の革命はあらゆる記念物を破壊する」のにたいして、「啓蒙さ

れた民衆の革命はそれらを保存し、美化する」からである。ここではフランス革命が啓蒙の理念を受け継ぐものであることが明言されていると同時に、テルミドール反動ののちに、やがてバレールをふくめてジャコバン派が、野蛮人に固有のものとされる破壊行為の主体として非難されると、ほぼ同一の論理構造がすでに開示されている点にも注目しておいてよいだろう。ヴァンドリスムを告発する論理は、革命の初期の段階からして、それを発する者自身の政治的立場を正当化する機能を果たす以外の、なにもものでもなかったのである。

8月のサロンへの自由参加の提案も、国民の宮殿であるルーヴル宮の一般公開と同じ理念の延長線上でなされている。この建物が「公教育の施設、学問・技芸の記念物の収集」に用いられることが決定した以上、そこで開催されるサロンへの出展には、いかなる制限も設けられてはならず、あらゆる芸術家が平等に参加を許されるべきである。作家がその作品を公開するのは、憲法の基礎をなす諸権利の平等にしたがって、あらゆる市民に思想の表明が許されているのと同じである、とバレールは述べる。ところで、これまでサロンへの自由参加を阻んできたのは、特権団体としてのアカデミーにほかならない。アカデミーは「世論によってのみ活かされ、自由によってのみ繁栄する芸術にたいして、恣意的な権威を行使しつづけてきた」のだった。この議論は、芸術ないしは知識一般の進歩に逆行したアカデミーにたいする、前の年の立憲議会での批判を受け継ぐものであり、ランジュイネや、さらにマラーが特権団体であるアカデミーの廃止と、それにかわる諸個人の自由な競争の喚起を提案したのと同じことがらを、バレールはサロンという制度について要求しているのだ。そしてそれは、直接に言及されているわけではないけれども、この報告のつい2か月前にル・シャプリエ法によって確認された精神の、芸術の領域における応用でもあった。バレールによれば、真の才能はけっして競争をおそれない。むしろ競争こそが絵画・彫刻の進歩を導きだすはずである。これにたいしてはサロンが「下手くそな絵」で充されないために、ある種の規制が必要であるとの反論も議員のなかからでてくるが、しかし自由参加を支持する意見のほうが全体としては支配的であり、結局この提案が可決されたことは、当時の趨勢がどうであったかを知るうえで重要である。

こうして、それまで閉ざされた空間であったルーヴル宮は、それ自体が美術館のかたちで国民に向けて開放されるとともに、そこで開催されるサロンもまた、閉鎖的な集団であるアカデミーを超えて、画家の自由な参加が認められるという、二重の意味での開かれた知識の場所へと変貌を遂げることになる。90年の秋にはすでに記念物委員会が設置されて、美術品（とりわけ教会財産の国有化にともなう多数の絵画や彫刻作品）の収集・整理の作業をはじめていたが、さらに92年になると美術館委員会も設置され、美術館の開館はいっそう実現に近づいてゆく。美術館委員会の設置にかかわった内務大臣ロランによれば、ルーヴルの公開は、自由をかつとったフランス国民の栄光を諸外国に知らしめるものであり、これは90年の夏にルブランが学問・技芸の奨励について表明した観点につながる。しかしまた同時に、彼は美術館が「美術の

趣味を育て、愛好家を楽しませ、芸術家にとっては学校となる」べきであり、「それはすべてのひとにたいして開かれてなくてはならない」とも考えていた⁵⁾。そのような国民の宮殿であるルーヴル宮が、「専制君主たちは芸術の名品を独占していた。〔……〕それらを国民の財産に戻さねばならない⁶⁾」と述べたセルジャンの提案する法令にもとづいて、共和国中央美術館の名のもとで開館するのは（ただし名目上の開館だが）、先にみてきたアカデミーが廃止された2日後、王権の停止一周年と新しい憲法の公布を祝う8月10日のことだった。なお、同じ年の6月にはラカナルの提案により、かつての国王の庭園が自然史博物館に改組されている。

この美術館の開館にいたる過程の途次で、バレールが行なっているもうひとつの報告が、われわれの主題とのかかわりで注目できるだろう。93年の2月になって、ルーヴルの公開への見通しや同様の施設の各県における開設、そのために記念物委員会がつづけている活動の成果について語りながら、バレールは、革命がはじまって以来不遇な状態におかれている芸術家にたいして、特例的な奨励を実施するよう提案している。「芸術家はフランス国内で確実な庇護と寛大な扶助を受ける必要がある。芸術家には仕事が不足している。彼らの才能は挫けており、一家の父親である場合には、日々の生活に必要なものを手に入れる望みも断たれている。〔……〕芸術が手助けなしに衰微し、引きとめられずに逃げ去ってゆこうとしているまさにこのとき、才能の持ち主の取り分、芸術の資産はふんだんに配分されてしかるべきである⁷⁾。」ここで芸術家への国庫からの支出は、すぐれた才能の持ち主にたいする報償というよりも、文字どおりの《励まし encouragement》であり、さらには、扶助の言葉が用いられているところから想像できるように、やがて翌年の国民公会で彼みずからが報告する主題である、救貧問題につらなるものとして構想されている。それでは、この時点で芸術家はどのように困窮しているのか。革命がはじまり、特権階級が消滅したからにはほかならない。「諸革命にさいしては芸術は忘れ去られるかさもなくば無視される。革命期の無秩序な運動のなかでは、芸術の天分は眠りまどろむかさもなくば逃げ去ってしまう」と述べるバレールは、ただ社会の混乱が芸術への無関心を惹き起こしたというばかりではなく、貴族および僧侶階級の没落とともない、これまで芸術家を支えてきたパトロナージュが衰退した状況をも意識していたにちがいない。このような提案は、90年の段階でランジュイネやマラーが主張した、アカデミーとは別の次元での個人としての芸術家を対象とする奨励から、平等主義に向けてさらに大きく踏み出ており、また、後でふれることになるであろう、テルミドール後のヴァンダリスム論に付随して展開される奨励政策も、ほとんどおよびえない内容のものであった。

1790年以來の科学と芸術とをめぐる議論は、最終的に93年の8月にアカデミーの廃止と美術館の開館につながるが、そこに通底しているのは、社会的に有用であるはずの知識を、特権的な階級や集団による閉鎖と独占から救いだし、公開することによって、個人にたいする平等な再配分をめざす動きであったと要約することができる。もっとも、このような知識にかんする

功利主義と平等主義は、フランス革命の開始とともに始めて登場してきたものではなく、18世紀の後半をつうじて繰り返し主張されていたことを明記しておくべきだろう。『百科全書』が技芸の有用な性格を強調していた点についてはすでにふれたが、人間の知識一般にかんしても、「今世紀の最大の特徴は、有用なものの愛好とたんに好奇心をそそるだけのものへの嫌悪である⁸⁾」という観念が支配的になろうとしていたのだった。知識が有用である、あるいは有用でなくてはならないことは、けっして急激にはなかったが、市場経済が発達し工業化がはじまるとともに、社会のあらゆる領域で要請されようとしていた。そして有用であるべき知識が、広く社会のなかで共有されるのを拒むのみならず、その進歩を阻んでさえいるのが、好奇心をみたすためにのみ研究をつづける特権階級の人間であり、また集団のなかに閉じ込めて特権を行使する科学アカデミーであるとする批判もまた成長してくる。さらに、旧体制下でマラーと連携して科学アカデミーに批判を加えたブリッソーが「科学の支配のもとには専制君主も、貴族も、選挙人も存在しない。それが映し出すのは、有用性を承認に値する唯一の資格とする、完璧な共和国である。法令でもって才能の所産に封印しようとする、専制君主や貴族、選挙人を認めれば、事物の本性と人間精神の自由を侵犯することになる⁹⁾」と述べるとき、こうした知識観はいきおい社会体制全体にたいする批判へと変わる可能性をも秘めていた。

また、ルーヴル宮の絵画作品その他の公開についても、すでに旧体制の末期から現実検討がはじめられていたが、その大きなきっかけとなったのは『百科全書』にはかならない。《ルーヴル》の項目のなかで、13世紀に建設が開始された「この壮大な宮殿」が、いまだ完成にはいたっていないことにふれたあとで、ディドロは条件法をもちいて次のように述べている。「この建物の一階全体を掃除して、柱廊を再建することが望まれる。柱廊は王国にある最高に美しい彫像を並べ、もはや散策する者もない庭園に散在している、この種の貴重な作品を集めるのに役立つだろう。[……] 南に位置する箇所には国王のもつすべての絵画をおくことができるだろう。それらは現在のところ物置のなかに乱雑に詰め込まれており、誰もみて楽しめない状態にある¹⁰⁾。」この項目をふくむ巻が刊行されたのは1765年のことだが、その6年前からサロンの批評の執筆をはじめていたディドロは、当然ながらルーヴルの状態を周知していた。そして同じころユベール・ロベールの描く廃墟の風景に関心をもつなかで、「宮殿は私に圧政者、放蕩者、怠け者を思い起こさせる。[……] 宮殿を興味の対象に変えるには廃墟としなくてはならない¹¹⁾」と書く作家が、『百科全書』において宮殿の現状を記述しその再編成を提案することの政治的な意味は、あらためて問うまでもないだろう。宮殿の閉鎖性と財産の独占を専制にむすびつけ、これを革命の成果として公開し、教育の手段とすることに対置させる、先にみてきた1791年のパレールの提案には、こうした『百科全書』で展開された理念が、ほぼ忠実なかたちで継承されているとみてよいだろう。

ディドロの提案はさらに、自然史の部屋や各アカデミーの会議室を設置し、また一部をアカ

デミー会員および芸術家の住居に提供することにまでおよんでいるが、このようにして再編され一般に公開される新しい空間は、《美術館 musée》と呼ばれてしかるべきものであった。というのも、古代のアレクサンドリアの美の女神の神殿であるムセイオンから説き起こされる『百科全書』の別の項目には、「musée という語は以後もっと広い意味をもつようになり、今日では芸術とその女神に直接にかかわる事物を収容するすべての場所にあてはめられる」とあり、「さまざまな学問の進歩と完成」を目的として建てられた、オックスフォードのアシュモolean美術館が具体的な例としてあげられているからである¹²⁾。それまで特定の階級に独占され、あるいは朽ちるがままに放置されてきた記念物や芸術作品を保存し修復して、自然史にかかわる知識とともに一般の市民に公開することは、『百科全書』のめざす啓蒙の拡大にとってきわめて重要な課題のひとつであった。また他方で、このふたつの項目はそうした知識の開放、芸術作品の自由な享受を要求する《公衆》がしだいに成長しつつあることを明確に示しているともいえるだろう。『百科全書』が提起したルーヴルの美術館化の構想は、やがて具体化に向けて動きはじめ、1778年になると検討の作業がアンジヴィレル伯爵に命じられるが、財政事情その他の関係で、結局のところ公開にまでいたることはなかった。ところがついに、旧体制ですでに議論の対象となりながらも実現しなかったことを、あらためて採りあげる機会が現われてきたのだ。1789年の到来である。フランス革命は、18世紀をつうじてたえずめざされてきた人間の知識の再生を確実なものにしてゆくであろう。さしあたり、1793年までは。それこそが、アカデミーや芸術家の奨励、美術館の開設にかんして、マラーやバレールたちの展開したことであった。そして同じ理念は、アカデミーが廃止されたときマラーはすでにこの世を去っているとはいえ、しかしそれでも彼らの理念のいくぶんかは、ジャコバン独裁期にまでももちこまれることになるのである。

1) 以下、90年夏の立憲議会での討論の内容については、煩雑を避けるため引用ごとの註記はしないが、すべて *Archives parlementaires*, t. XVIII. に採録されたテキストに依拠している。

2) *L'Ami du peuple*, no. CXCV, pp. 3-4.

3) R. Hahn, *The Anatomy of a Scientific Institution*, Berkeley, 1971, p. 224. その後のアカデミーにたいする一連の批判については、F. Waquet, *La Bastille académique*, in J.-C. Bonnet (éd.), *La Carmagnole des muses*, Paris, 1988, pp. 19-36. も参照。

4) *Rapport sur les domaines à réserver au roi*, *Moniteur*, t. VIII, pp. 500-502. および *Projet d'un décret qui accorde le droit à tous les artistes sans distinction d'exposer au Salon*, *Moniteur*, t. IX, pp. 452-453.

5) *Lettre de M. Roland à M. David* (le 17 octobre 1792), *Moniteur*, t. XIV, p. 263.

6) *Archives parlementaires*, t. LXIX, p. 475.

7) 「記念物委員会および芸術家の奨励についての法令の提案」(前出『資料 フランス革命』354ページ)。

8) J. -M. -A. Servan, *Discours sur le progrès des connaissances humaines en général, de la*

morale et de la législation en particulier, Lyon, 1781, pp. 16-17.

- 9) *De la vérité*, Neufchâtel, 1782, pp. 165-166.
- 10) *Encyclopédie*, article 《Louvre》.
- 11) *Salons de 1767*, in *Œuvres*, t. XVI, 1990, Paris, p. 348. なお、この点については拙稿「廃墟の18世紀」(樋口謹一編『空間の世紀』筑摩書房, 1988年所収)を参照。
- 12) *Encyclopédie*, article 《Musée》.

Ⅱ 徳と効用：戦争のなかの科学技術

知識は社会的に有用であり、あるいは有用でなくてはならないという、18世紀の後半を一貫して支配した確信は、革命の開始ののちも弱まるどころかいっそう増幅されてゆく。確信を現実のものとなしうる時代がやってきたのだ。フランス革命期において百科全書派の最後の世代に属するコンドルセは、おそらくそうした確信をもっとも強くいだいていたひとりであるが、この数学者にとって、技術の完成は「市民一般の快樂を増進する」ことを目的にしており、また知識の進歩は「個人の幸福と共同の繁榮」をもたらすはずであった。これがコンドルセの公教育にかんする理念の出発点であり、彼はまた同じ観点から度量衡の制度の改革にも関与して、それが「省察ないし自然の研究をとおして獲得された知識を、人間の利益のためにもちいる機会」であると認め、さらには自然科学（とりわけ確率論）を社会のさまざまな問題の解決に応用し、完成したさいには「新段階の有用性」を獲得するであろう《社会数学》を構想していた¹⁾。このような自然科学の有用性を疑うことのなかったコンドルセは、しかし、1793年になってジロンド派の没落とともに逃亡生活にはいり、翌年の春には獄中でみずから命を絶ってしまう。彼の死は、後でふれるラヴォワジエのそれとともに、この時期の科学者の、また知識全体の辿ったひとつの運命を象徴する事件であった。知識と社会の進歩にかんする確信は、ここで完全に潰えてしまうかにみえる。だが、皮肉なことではあるけれども、自然科学の社会的効用の大きさは、むしろジャコバン派の独裁が成立したのちの公安委員会において、それまでにもまして強く認識されることになるのだった。

93年の8月にふたりの人物が公安委員会にはいることになる。いずれも旧体制における技術将校を養成する唯一の学校であったエコール・ド・メジエールを出て、革命のはじまる前には国王の軍隊に所属していた、カルノーとプリウールとである。92年の4月から対オーストリア・プロイセンの戦争がつづき、しかも戦況はけっして好転しないなかで、「戦争の経験者が欠如しており、作戦計画や戦略体制を立てることのできるメンバーがただひとりとしていない」公安委員会に「ともに熱意、才能そして誠実さにあふれ、かかる状況において必要な勇氣をそなえ、軍事技術の深い知識を有した〔……〕ふたりの技術将校」を加えることを推挙したのはバレールだった。ふたりを「穩健派」と考えていたロベスピエールは、この提案に最初は

賛意を示さなかったが、科学的知識の現実における効用を説くバレールの前に結局は譲歩したという²⁾。ここでバレールは、91年に芸術について表明していたのと同じ観点を、科学と技術にたいしても示しているとみてよいだろう。こうして支持されたふたりは公安委員会のなかにもあっても、ロベスピエールやサン＝ジュストとは距離を保ちつづけながら、カルノーは主として軍隊の組織化に携わり、プリウールは戦争の遂行に不可欠な物資（武器と火薬）の生産に関与することで、科学的知識とそれにもとづく技術がいかに有効であるかを国民のあいだに広めてゆく。「フランスは武器の不足から滅びるおそれがあると、委員会にはいる数カ月前から確信し」その点をたえずダントンたちに進言していたと、革命後にみずから語る³⁾プリウールは、国内の武器生産設備の拡充をはかり、火薬製造のための硝石の採掘を国民の義務として訴えると同時に、ムードンに軍事技術の実験施設を開き、さらに有用な知識を社会に広めることを目的とした教育制度の確立を構想する。最後のものはやがて理工科学校として実現するだろう。

プリウールは、このような一連の作業を単独で進めたわけではなかった。「諸君の〔公安〕委員会はあらゆる知識、あらゆる学識に取り囲まれている⁴⁾」と、93年の12月に硝石の採掘にかかわる法令を議会に提案したさいに語っているように、彼は技術将校であったころからの科学者との交流を活かして、ギトン・ド・モルヴォー、ベルトレ、フルクロワなど多くの知識人を周囲に集めて、武器の製造や実験の指導にあたらせたのだった。はじめにふれたマティエのいう「共和国2年の知識人の動員」とは、具体的にはこうした状況をさしている。だが科学者からすれば、それは動員と呼ぶよりはもう少し積極的な意味をおびたものであった。プリウール自身をふくめて彼らは、科学と技術が社会的に有用であると確信し、かつその確信を直截に証明するまたとない機会として、革命をそして戦争を捉えていたはずである。「われわれは必要に見合うだけの武器と火薬をいたるところで製造した。いくつもの発明の研究に熱意をもって専念し、圧政者たちを絶滅させる新たな手段を追加した」と、テルミドールを経てからではあるが、プリウールがその一年あまりにわたる活動を総括している⁵⁾ところに、当時の模様をうかがうことができるだろう。ムードンの実験施設では、たとえば1783年にモンゴルフィエ兄弟が発明した気球が実用化に向けて採用されたが、それが94年6月のフルーリュスの戦いにおいて、フランス軍を勝利に導く役割を果たしたことはよく知られている。あるいは戦場での気球の役割がどれほどのものであったのか、その判断は措くとしても、これは18世紀をつうじて成長してきた技術と知識が、戦争という状況に直面することによって、現実の社会に応用されてゆく過程を象徴するものではあった。

プリウールとカルノーを公安委員会に入れることで、いわば革命に科学的知識を導入したバレールは、軍事技術の領域における自然科学の貢献を「学問と技芸との結合、この巨大な事業を実行するにふさわしい技術者 *artistes* と共和主義者との結合」と呼んだ⁶⁾が、この「結合」にはふたつの側面があった。まず一方では、プリウールの例が示すように、またフルクロワや

モンジュたちがその周囲に結集したことからわかるとおり、以前からすではじまっていた科学者・技術者の革命への接近が、この時期になっていっそう急速かつ緊密に進行し、彼らは政治のただなかに一定の位置をしめるようになる。これは革命の世界への知識の導入であると同時に、科学的知識が政治化することを意味した。プリウールが、火薬の増産とその基礎になる硝石の採掘を、サン＝キュロットの精神や祖国愛に訴えかけ、また採掘のための手引を自由の樹のもとで読みあげるよう、法令のなかで提案するといった、少なくとも旧体制においてはおそらく彼自身も考えたことがなかったであろうレトリックを用いているのは、知識および知識人の政治化、革命の理念への接近をあらわすものにはかならない。客観的な知識による現実問題の解決（さしあたりは戦争への対応）に、革命の理念の達成、徳の共和国の実現という別種の目的が混入しはじめているのだ。だが、まだ後者が前者を圧倒的に支配するにはいたっていない。そして、プリウールが先のムードンの実験施設にかんする報告のなかで、ということではロベスピエールが没落して、自身の思想をいっそう自由に表明できるようになってからではあるけれども、「軍事技術は発明のための巨大な分野を提供するが、発明は人類にとっての恩恵である」と述べて、民間の産業の将来にも眼を向けている点を忘れないようにしておきたい。彼は革命の開始の直後から度量衡の制度の改革に関心をもっていたが、「理性の名による」空間の秩序の再編成は、複雑で多様な旧単位が体现する封建制を打破すると同時に、自由な商業活動の基礎をつくるはずであった⁷⁾。プリウールのみるところでは技術教育もまた、すぐ後でふれるように、最終的には来るべき工業の時代を担う人材の養成という意義を与えられることになる。

バレールのいう技術者と共和主義の結合には、他方で、自然科学の国民のあいだへの拡大・滲透という側面があった。国民公会に武器と火薬の増産の成功を報告し、事業のいっそうの促進を提案するバレールは、自然科学者に指導されて生産に携わるパリの市民の様子について繰り返し語るだろう。「かつていかなる革命も、人民が突然に化学者や物理学者になり、さまざまな技芸においてもっとも熟練した人びとと同等の才能をもって、またそれ以上の活力をもって、大砲を鑄造し硝石を生産している光景を呈したことはなかった⁸⁾。」化学者に姿を変えた人民という表現にはかなりの誇張があり、伝えられた知識がいかほどのものであったのかについてはにわかに判定しがたいけれども、しかしここで国民がそれまでにくらべて多くの有用な知識と技術を修得しつつあること、さもなくば少なくともバレールたちがそのように認識していることは否定できない。ここから、科学および技術の教育をさらに組織的に進めるという計画が生まれてくる。まず1794年の2月から3月にかけて、武器と火薬の製造にかんする《革命的な教育》がパリで実施された。会場となった自然史博物館には、全国のサン＝キュロット800名が集まり、フルクロワやベルトレが講義を担当した。ここでバレールが理解する技術教育は、短期間に効率的な教育を実践するという形式の点と、知識や技術とともに祖国愛や共和

国の精神もまた修得されるという内容の点と、二重の意味で《革命的な》と修飾されるべきものであった。「学校を開き生徒を養成し、科学や武器製造の講義を行なうのに、旧体制であれば3年を要していただろう。新しい体制はすべてを加速化した。各ディストリクトより選ばれた市民が硝石の精製、火薬の製造、大砲の鋳造を学ぶには、3デカッドあれば充分である⁹⁾。」人間の再生のために必要な知識の教育が、革命によって、あるいは科学と共和国との結合をつうじて、迅速かつ精力的に進められることになるのだ。もっとも、この革命的な教育という観念については、もう少し精密にみておかなくてはならない。

こうした武器・火薬の製造技術を短期間に修得させる教育は、大きな成功を収めた。少なくともバレールたちが議会に報告したかぎりでは、そのように受けとめられていた。中央公共事業学校つまりのちの理工科学校や、衛生学校もまた、正式に開校するのはジャコバン独裁の終焉ののちの94年秋のことだが、武器製造技術の短期間での教育の成果をふまえて、同じ《革命的な》と称される教育の一部として構想されたものだった。戦争が継続する状況は、武器や火薬の生産とともに、多数の医師や技術将校を必要とする一方で、このころには大学はいうまでもなく、プリウールやカルノーが出たエコール・ド・メジエールも、その教育機能がほとんど全面的に停止した状態にあった。ここでまたしても登場して、戦争と内乱による道路や港湾施設の荒廃し混乱した現況について報告し、それらの整備のために公共事業委員会を設置して中央集権的に事業を実施するとともに、事業において指導的な役割を担う技術者の養成機関の設立を提案したのはバレールだが、これは使用されるレトリックから推測するかぎり、おそらくはプリウールやフルクロワの意を受けたものだった¹⁰⁾。さらに公共事業の技術者の養成と並行して、医学（とは呼ばずに、政治状況にあわせてであろう、治療技術という表現がもちいられるが）の、また食糧生産のための農業技術の革命的な教育を実施する期間も構想されはじめる。こうしたいくつかの学校の計画は、しかし、武器の製造とは多少ことなり高等技術にかかわっていたため、そこに貴族主義の臭いをかぎとったロベスピエールの反対にぶつかってしまう。プリウールたちは、さしあたり公安委員会の指導者の意見に譲歩して、次節でふれるエコール・ド・マルスの開校へと計画を変更するだろう。構想の実現にはテルミドールの到来をまたなくてはならない。

中央公共事業学校は9月になって設立が承認され、12月に300名の学生を集めて開校するが、このときの授業の時間割には《革命的な講義》という言葉が残っていた。とはいえ、ここでもはや祖国愛と知識との結合はほとんど問題にならず、依然として継続している戦争に向けて技術者を早急に送り出すために、教育の期間を短縮すること、これが講義の革命的である第一の意味となった。そして翌年の1月になってあらためて授業計画を公刊するプリウールは、革命的な講義に替えて《ポリテクニクな教育》という表現をもちい、また秋には学校の名称さえもエコール・ポリテクニク（理工科学校）と変更して、さらにはこの学校における「有用

な技芸の実行に即座に応用できる教育」からは、軍事技術者に加えて「工芸であれ化学の技術であれ大規模な製造業を行なうにふさわしい人材」の出てくることを強調するにいたるであろう¹¹⁾。こうして早くも革命の後退がはじまるわけだが、しかし逆に、ブリウールたちが革命的な教育という語を採用したのは、94年の春から夏にかけての状況にあわせた、あるいはそれを利用したものにすぎず、彼らは祖国愛よりもむしろ有用な知識の社会への普及こそをめざしていたのかもしれない。ポリテクニクな教育とは、そうした目的を前提として、従来の個別の狭い範囲に限定した教育を行なうのではなく、多領域にわたる実知的な知識を総合的に修得させること、またその基礎に数学と物理学をおくことを意味していたが、この発想は最初に設立を提案したバレールの言説のなかにすでに埋め込まれていたのだった。のちになって議会で伝統的な専門教育の復活を主張し、この学校のありかたを非難する立場からは、それがもとは革命的な教育を提唱しており、またポリテクニクであるとは百科全書的であるにひとしいという点で批判されるが¹²⁾、この指摘はかえってブリウールたちの当初からの意図を明らかにするものだといえるだろう。有用な知識の拡大をめざす百科全書の精神は、「見分けにくい地下道をとおって」ではあるけれども、ジャコバン独裁の時期にまで、そしてその彼方にまでも影響をおよぼしたのだった¹³⁾。

ただ、それは戦争という状況の絶対的な要請に由来する、逆説的であるがひとつの幸運に支えられてはじめて実現したのもあった。しかもそのために彼らは、徳の共和国の建設を説くロベスピエールたちの意向をうかがい、その周辺で動揺し、場合によっては大きく譲歩し、あるいは革命的な教育という表現でもって本来の意図を遮蔽し、さらにはみづからの言説も少なからず政治イデオロギーに汚染されることを余儀なくさせられもした。現実根ざした有用性を追求する科学・技術観と、しだいに膨張しあるいは加熱化しつつある抽象的な革命の理念とのあいだで揺れ動く、ブリウールたちの姿をもっとも明確に示しているのが、93年11月のラヴォワジエの逮捕にはじまる一連のできごとである。すでにみてきたとおり、マラーたちが革命の以前から批判しつづけてきたアカデミーは、この年の8月についに廃止されていた。「その発明により人間精神の領野を拡大し」また「その進展を保証し有用な真理を広めてきた」科学アカデミーだけは、グレゴワールの配慮により廃止を免れるはずだったが¹⁴⁾、彼につづいたダヴィッドの発言が受け容れられて、結局すべての団体が例外なく廃止されたのである。科学アカデミーが進めてきた度量衡の新制度の研究については、しかし、ことがらの重要性を考慮して、旧アカデミーの科学者集団にひきつづき委ねられることが決定した。ドランプルとメシャンによる子午線の計測の作業は、すでに前の年からはじまっていたのであり、研究全体を総括する立場にあったのがラヴォワジエである。ところがそのラヴォワジエが、旧体制のもとで徴税請負人の職にあったことを理由に逮捕され、作業は突然に停止してしまう。度量衡にかかわる臨時委員会はラヴォワジエの釈放を嘆願する書類を提出するが、これにたいして公安委員会から

かえってきたのは、釈放を拒否する内容の回答であり、あまつさえそこでは公職は「共和主義の徳と諸王にたいする憎悪によって、信頼するにあたいする人物」にしか委ねられないとして、ドランプルやボルダなど旧アカデミーの科学者の解任が命じられていた。しかもこの布告は、実は公安委員であるプリウール自身の手になるものだった¹⁵⁾。

翌年4月のラヴォワジエの処刑はやがて、ジャコバン独裁期において組織的な迫害が知識人にたいしてなされたという、その典型のように語られることになるであろう（「共和国は知識人を必要とはしない」という文言も、この裁判のさいに裁判長のデュマが発したものだという説が、テルミドールを経たのちに広まるが、それは現在では否定されている¹⁶⁾）。この事件を回想するドランプルによれば、プリウールはラヴォワジエの家で開かれた度量衡の研究をめぐる会合にしばしば出席していたが、とりわけ政治が話題になったときには、ほとんどいつも他の参加者と対立し、孤立した立場にあったという。それ以来いだいていた強い敵意と怨恨の念こそが、釈放を拒み科学者を排除する12月の布告をみずから起草した理由であると、ドランプルは説明する¹⁷⁾。もっとも、プリウールの公安委員会の指導者層との関係が必ずしも緊密なものではなかったことを知っているわれわれには、この解釈はあまりにも一方的にすぎるように思える。むしろプリウールの伝記のなかでブシャールが弁護しているように、このときの彼の行動は恐怖心によるもの、自身にもふりかかるおそれがないわけではない、公安委員会や保安委員会の疑惑を避けるためのものであったかもしれない¹⁸⁾。さらに重要なことには、困難な状況のなかで測量作業を継続したという自負心と、それを妨害しようとした人物にたいする侮蔑に充ちたドランプルの記述からは、アカデミーの周辺の科学者たちが、技術将校出身の公安委員を自分たちの同輩とはけっしてみなしていなかった様子がうかがわれる。逆にプリウールの側にも、彼らと同じ集団に所属しているという意識は稀薄であったにちがいない。この時期のフルクロワやモンジュの、アカデミーやラヴォワジエにたいする態度のなかに、伝統的な科学者集団にたいする執着心の欠如、共同体への所属感の消失を指摘するのはロジャー・ハーンであるが¹⁹⁾、同様のことをプリウールについても認めることができるのではないだろうか。自然科学者の世界において、ひとつの世代交替が確実に進行しつつあったのだ。啓蒙の理念を継承して、それをジャコバン独裁期の文化政策のなかにもちこみ、動揺する状況に直面してみずからも意識の変化を経験しつつ、有用な知識を完全にではないまでも普及させていったのは、こうした新しい世代に属する科学者であり技術者であった。

それにしても、プリウールたちが恐怖心をいだき、距離をとりながらも部分的にはその立場に加担し、あるいはエコール・ド・マルスの場合にそうであるように隠蔽と譲歩を繰り返さなければならなかった、その当の相手であるロベスピエールやサン＝ジュスト、この時期の政治的指導者たちは、科学と技芸、広くは知識一般についてどのような観念をもっていたのだろうか。彼らの残した言説から明確な科学観ないし知識観を抽きだすことは困難である。プリウー

ルらに少なからぬ疑念をいだいた彼らも、しかし、少なくとも戦争が継続するなかでは、科学・技術が軍事の領域で大きな成果を挙げることでそれ自体は否定できなかったにちがいない。とはいえ、バレールのように「技術者と共和主義者との結合」を積極的に賞讃することもまたけっしてなかったであろうが。93年の夏から翌年の夏までのあいだ、政治闘争に終始したロベスピエールたちには、科学的知識の有用性を賞讃しているだけの余裕も、また関心もほとんどなかったとみるべきである。彼らの関心はむしろまったく別の次元にあった。いうまでもなく、徳の共和国の建設である。そしてフランス人民の再生と革命の理念の徹底は、知識や技術によってではなしに、道徳によってこそ導かれねばならなかった。「ヨーロッパの諸国民は、技芸および科学と呼ばれるものにおいて驚くべき進歩をなし遂げた」と、最高存在の祭典の開催を提案するロベスピエールは認めはするものの、しかし即座に「公共の道徳にかかわるいくつかの最高の概念については無知であるように思われる。彼らはすべてを知っている、ただし権利と義務を除いてである²⁰⁾」とつづけるのだ。92年のコンドルセの公教育の計画が知育を中心にいたものであったのにたいして、93年の夏にロベスピエールが国民公会で読みあげたルペルティエ案や、サン＝ジュストの描いた国民教育案では、徳育が優先されていたという、周知の対比も同様の観念に由来している。

ジャコバン派の指導者たちのみるところでは、物質よりも精神が、現実よりも理想が先行しなければならず、知識の有用性もまた道徳の枠のなかでのみ意味をもちうるのであった。さらに、『学問芸術論』以来文明批判をつづけたルソーを、18世紀における唯一の有徳者として理想視するロベスピエールの場合には、さらにまた別の要素も付け加わってくるだろう。たとえばコンドルセは、敵対する党派に属する強力な論客であったことはまちがいがなく、おそらくは党派の対立からくる以上のものが、ロベスピエールの執拗な敵意のなかにはふくまれていたと推測してよい。というのも、1792年12月に彼は、ミラボーの胸像とともにエルヴェシウスのそれも打ち砕くことを要求して、次のように述べているからである。「エルヴェシウスは陰謀家、才人ぶった惨めな人間、背徳者であり、われわれの讃辞にもっとも値するあの良きJ=J・ルソーへの、もっとも残酷な迫害者のひとりであった²¹⁾。」世代こそずれるとはいえコンドルセも、ルソーを不遇に追いやった知識人たちとのつらなりのなかに位置づけられてはいなかっただろうか。ロベスピエールが、アカデミーの廃止やラヴォワジエの逮捕に直接に関与したわけではないが、かりに関与したとすれば、その知識人集団にたいする批判は、先にみてきたマラーらの功利主義的な知識観にもとづくのとは、かなりちがった様相のものであったことが予想される。ブリュールたちの活動は、こうしたジャコバン派の指導者とは距離をとりつつ、しかし一部ではその理念を受け容れることをとおして展開されたのだった。だが、戦争に必要な技術についてはある程度可能であったことも、他の学問・技芸の領域では実現が困難になるであろう。しかも問題は、政治状況の急迫とともにいっそう増幅され、歪曲され、逸脱

してゆくはずである。

- 1) 『革命議会における教育計画』（渡辺誠訳，岩波文庫，1949年）11ページ。Rapport sur le choix d'une unité de mesure, *Archives parlementaires*, t. XXIV, p. 394. Tableau général de la science, qui a pour objet l'application du calcul aux sciences politiques et morales, *Œuvres complètes*, vol. I, p. 542.
- 2) *Mémoires de B. Barère*, Paris, 1842, t. II, pp. 105-106 et 368.
- 3) Révélation sur le Comité du salut public, reproduite in G. Bouchard, *Prieur de la Côte-d'or : un organisateur de la victoire*, Paris, 1946, p. 435.
- 4) Rapport sur la récolte du salpêtre, *Moniteur*, t. XVIII, p. 587.
- 5) Rapport sur le régime de l'établissement des épreuves à Meudon, *Moniteur*, t. XXII, p. 70.
- 6) Rapport sur la fabrication des armes et des poudres, *Moniteur*, t. XIX, p. 385.
- 7) *Mémoire sur la nécessité de rendre uniformes, dans le royaume, toutes les mesures d'étendue et de pesanteur*, Dijon, 1790. et *Nouvelle instruction sur les poids et mesures*, Paris, 1795.
- 8) Rapport sur l'encouragement de la fabrication des salins et des potasses, *Moniteur*, t. XX, p. 255.
- 9) Sur l'instruction révolutionnaire de la fabrication des armes et des poudres, *Moniteur*, t. XIX, p. 510.
- 10) Rapport sur la commission des travaux publics, *Moniteur*, t. XI, X, p. 683.
- 11) *Mémoire sur l'Ecole centrale des travaux publics*, Paris, 1795, p. 8.
- 12) Baraillon, *Opinion sur l'Ecole polytechnique*, Paris, 1798.
- 13) J. Langins, *La République avait besoin de savants*, Paris, 1987 p. 95.
- 14) Rapport relatif à la suppression des académies, *Archives parlementaires*, t. LXX, p. 520.
- 15) G. Bouchard, *op. cit.*, p. 295.
- 16) J. Guillaume, Un mot légendaire : «La République n'a pas besoin de savants», *Révolution française*, t. XXXVIII (1900).
- 17) *Grandeur et figure de la Terre*, Paris, 1912, p. 212.
- 18) Bouchard, *op. cit.* p. 296.
- 19) Hahn, *op. cit.*, pp. 24, 264 et 274.
- 20) 「最高存在の崇拜について」（前出『資料 フランス革命』502ページ）。
- 21) *Œuvres de Maximilien Robespierre*, t. IX, p. 144.

Ⅲ 理性の徹底：知識から祭典へ

知識はまず，なにごとであれ現実の問題解決のための有用な手段であり，したがって社会のなかで一定の役割を果たさない知識を追求したり，あるいは有用な知識の展開を妨げる制度は批判されなくてはならない。こうした18世紀の後半以来の知識観は，フランス革命期にそしてジャコバン独裁期にまで継承され，とりわけ理工科学校の開設が象徴するように，さらに革命後の社会へと伝達されてゆく。だが，この道具としての知識が達成すべき目的のなかには，現

実にたいする適応と並んで、ある種の抽象的な理念の実現という別のことがらが混入しており、しかも後者はしだいに前者を圧倒するにいたるだろう。1790年夏の文化支出をめぐる議論におけるルブランが、また92年にルーヴル宮の公開について語ったロランが、いずれも内外に誇示しうるフランスの《栄光》に言及したとき、すでに現実の諸問題と同時になんらかの理想への接近が、知識の達成すべき目標として設定されていたのだが、この傾向は、王政が廃止され共和政が宣言されて以来いっそう顕著なものとなり、またジャコバン独裁の成立によってさらに加速されるのだ。「公教育のなかでもっとも本質的な部分が無視されている。すなわち国民の産業の発展にかかわる教育、職業教育である。しかもこうした有用な教育が祭典にとってかわられているのだ¹⁾。」彼自身ジャコバン派にもっとも忠実な科学者のひとりであったアッサンフラッツが、93年の7月になって漏らすこのような苦言からは、知識の達成目標の現実から理想への移動、またこれにともなう知識が社会的に呈示されるかたちの変容（教育ではなくして祭典）をうかがうことができるだろう。

科学アカデミーだけは免れさせようとするグレゴワールの意図にもかかわらず、ダヴィッドの提案が受け容れられて、すべてのアカデミーが例外なく廃止された点については先に述べた。ところで国民公会の結論を一気に導いたダヴィッドの言説の大半は、実は科学アカデミーよりはむしろ美術アカデミーに向けての攻撃からなっていた。そうした事情にふくまれるある種の奇妙さ、そしてダヴィッドが展開したレトリックもまた、知識をとりまく状況の決定的な転換を告げるものにほかならない。アカデミーを支配しているのは、ダヴィッドによれば、団体の精神であり、構成員のあいだの低劣な嫉妬心であり、そこでは若い才能を押しつぶすために残酷な手段が用いられている——これは以前からのマラーたちの攻撃のなかにもしばしば登場した表現である。だが、ここでさらに注目する必要があるのは、アカデミーの悪弊がその「均衡 *équilibre*」を維持する傾向に求められている点である。「国王の政治は王位の均衡を保つことであり、アカデミーの政治は才能の均衡を保つことである²⁾」とダヴィッドは述べて、安定と均衡を重視する美術アカデミーが、新たに現われたすぐれた才能を理解できないどころか、それをどのように排除してきたかについて、聴衆の注意を喚起する。彼の考えるところでは、安定は停滞につながるものにほかならず、これほど革命の時代にふさわしくないものはなかったのだ。そしてこの均衡を打破して革命を前へ押し進めるのは、のちにダヴィッドとともに美術館行政に関与するマティウの言葉を借りれば、「共和国の自由の唯一かつ真の要素」である「活力と啓蒙」であり、しかもその活力の源泉は祖国愛にあった³⁾。

93年の末から94年の初頭にかけて、記念物委員会と美術館委員会の改組を提案するダヴィッドとマティウは、ふたつの委員会の作業がはかばかしい進展を示さず、むしろ文化財の破壊が激化してゆく状況を前にして、委員会が旧アカデミーにつながる知識人で構成され、したがってそこでは祖国愛が欠如している点を重大な問題として指摘する。先に国民の宮殿であるルー

ヴルを公教育の場所に変えようとしたバレールと同じく、彼らもまた美術品の保存が社会にとって有用であることを強調し、美術館が奢侈・軽薄の品物を集めた、ただ好奇心をみたすのものではなくして、公教育のための「重要な学校」とならねばならないと認めてはいる。しかし、ロベスピエールの絶大な信頼と支持をえていたダヴィッドたちによれば、美術館の開館や歴史的・芸術的記念物の保存は、フランス人民の偉大さを世界にたいして、また後世に向けて示すためのものでもあり、それゆえ美術品や歴史にかんする知識のみでは、これらの事業を確実に推進してゆくのは不可能であった。「知識と才能の価値は、そこに顕著な祖国愛が付け加わらなければ充分ではない」のであり、また既存の「美術館委員会は、祖国愛との関連で非難されるべきであったり。」芸術は祖国愛によって導かれることで、その活力を回復させなければならず、また逆にそうした芸術は、たえず革命精神の昂揚に貢献するのでなければ意味をなさない。同じ時期にプリウールが硝石の採掘をサン＝キュロットの精神に訴えかけ、バレールが軍事技術の開発における科学者と共和主義の結合を賞讃していたことを思い出しておこう。こうして芸術の領域においても、共和国の徳の理念が知識を支配しはじめ、その支配は科学におけるよりもいっそう強固なものとなるのだ。

ダヴィッドたちが美術品の保存その他の作業に祖国愛を要求した、その背景には革命の進行とともに文化破壊の行為がたえず激しくなるという状況があったことはいうまでもない。野蛮な破壊行為は貴族や外国の陰謀によるものであることを主張し、これにたいして美術品を破壊から保護し、公教育の拡大と共和国の栄光の誇示に役立てるのが国民公会の義務であるとする、つまり破壊を外部の敵の責任に帰着させることで、自分たちの政治的立場を正当化するという論理構造の点では、のちのヴァンドリスム論と変わるところのない言説が繰り返し展開され、たとえば93年の6月には「誰であれ国民の財産に所属する芸術的記念物を破壊するものには2年の禁固刑」を課す法令が、ラカナルの提案により可決されていたが⁵⁾、国民公会の措置や記念物委員会の活動は現実に追いつくべくもなかった。11月には非キリスト教化運動がひとつの頂点に達し、教会の建築や美術品にたいする攻撃もまたいっそう強まってゆく。作業を続行するには祖国愛と活力に欠けるとマティウが判断した記念物委員会は臨時芸術委員会に、また美術館委員会は美術館コンセルヴァトワールにとってかわられることになる。臨時委員会の発行した、ヴィック・ダジルの手になる美術品の整理と保存を各県に呼びかける指示書では、教育がフランス人民の「再生と栄光のもっとも強力な手段」であり、そこからは「共和国の頑強な防衛者と圧政にたいする仮借ない敵」とが産出されることが強調され、記念物はそうした教育に役立つものであるからこそ、その価値についての無知は許すことのできない犯罪であり、丁寧に保存され整理される必要があると明記されていた⁶⁾。こうして無知を敵として斥けると同時に、共和国の理念に裏打ちされるかたちで、記念物の保存活動があらためて展開されてゆくにみえる。もっとも、祖国愛によって活力を注入されたはずの委員会は、すぐさま同じ共和

国の徳の別のところでの発現によって、自由に活動するのを妨害されるだろう。94年春のいわゆるヴァントーズ法は、「地上に美德への愛と幸福を広める」ためにサン＝ジュストの提案したものだったが、革命の敵の財産の共和国による没収を定めたこの法が優先されることで、美術品の整理作業が停滞せざるをえないという報告が地方から届けられ、委員会はその対策に苦慮しなければならなくなる⁷⁾。ヴァントーズ法は、ジャコバン独裁期における革命の理念をもっとも鋭く表現したものであると同時に、内部の矛盾をもっとも鮮明に象徴するものでもあった。共和国の精神と結合し、その実現に大きく貢献するはずであった知識は、まさに徳が最高度に呈示されたときに、理想と現実のあいだで引き裂かれてゆくのだ。

93年秋以降の知識と共和国の精神との極度に抽象的な結合の例は、度量衡の新制度と並んで生活世界における重大な変革である、共和暦の施行にもみることができる。時間の秩序もまた、空間の秩序と同様に革命のはじまる前からその改編が提案され、たとえば1788年にはシルヴァン・マレシャルが、この年を《理性の支配第1年》と呼び、毎日を飾る聖人を歴史上の著名な人物に変更した『正直者の暦』を発行していた。その後も90年の春になって、フランスが再生し自由への愛が地上を征服した今こそいい機会であるとして、暦の改革を天文学者のラランドに促す、無署名の書簡が『モニトゥール』に掲載され⁸⁾、実際に貨幣などには《自由1年》の文字が刻まれてもいた。だが、度量衡の単位の多様さと複雑さが現実にもふつごうを生じさせていたのとは対照的に、革命意識の徹底と反カトリックという理念上の問題を別にすれば、暦には改革のための必然的な根拠はなんらなかった。グレゴリオ暦の廃止と新しい暦の作製は、共和政が宣言されてのちにはじめて実際に着手されるのであり、この点にすでに共和暦の抽象的な性格が現われている。93年の秋にロムが国民公会に提出した暦では、共和国の第1年は1792年9月22日、共和国が誕生するとともに、秋分の日であるために昼夜の長さが等しく、さらに太陽が黄道上で天秤座と重なる、つまり社会の革命と天体の回転 *révolution* とが一致して平等を実現したときからはじまっていた。また、永いあいだ人民を無知のままに支配してきた宗教にかかわる各月や日の名称にかえて、共和国、自由、平等などの革命の理念、バスティーユをはじめとする革命に関係した地名、さらに槍や花型帽章などサン＝キュロットのもちものが採用されるはずであった⁹⁾。こうした名称の提案は結局のところ退けられるものの、それでも抽象的な観念がどれほど色濃い影をこの暦、つまり時間にかかわる知識の総体に落としていたかは、たやすく想像できるだろう。

ロムは自身が数学者の出身であり、暦の作製にあたってはモンジュやラグランジュらの自然科学者の協力をえたことを強調してはいるが、基本的には太陽暦が踏襲されたのであり、ドランプルたちの子午線の計測作業にくらべると、ここでは自然科学の知識はごく象徴的な役割しか果たしてはいない。知識は革命の精神の滲透のために《動員》されているにすぎず、そのぶん現実における効用という目的を喪失し、あるいはそれ自体が極端に肥大化するのだ。とりわ

け従来の暦で7日間が1週間であったのが改まり、10日間をデカッドと呼ぶことにして、どの月も等しく3デカッドから構成されることとなったが、ロムはこれを度量衡の新制度でも採用された十進法の利点に注目したからであるという。十進法はさらに時間の細部の計算にまでもちこまれ、1日は昼夜10時間ずつ、また1時間は100分となる。空間と同じく時間にも十進法をあてはめることは、日常生活における理性の徹底を意味し、このあたりには数学者としてのロムの発想を感じとれるけれども、しかしそれはすでに合理主義の本来の目的をはるかに逸脱した徹底ではないだろうか。度量衡の単位の世界への浸透をはかるためにプリウールが書いたパンフレットによると、このころ幾何学の角度の計算も十進法で行なうことが構想されていたという¹⁰⁾。先にみてきたとおり相対的に穏健な立場を保ったこの技術者は、さすがにそうした試みにまでは賛意を示していないが、革命が進行して、共和国の理念と科学的知識の結合が緊密になる過程のなかで、理性はこれほど極端に、非合理的と呼ぶことも不可能ではないところまで追求されてゆくのだった。

十進法の採用による合理主義の徹底と同質のことがらは、この時期の自然についての観念のある種の変容のなかにもうかがうことができる。ロムは新しい暦の各月の名称として、共和国の理念その他を用いるよう提案したが、国民公会で受け容れられず、ファール・デグランティエヌがダヴィッドやマリ＝ジョゼフ・シェニエの協力をえて、あらためて考案することになったが、彼らの結論は自然の現象や農業にちなんだ名称にし、毎日の聖人の名も同じく農産物、花、家畜などの名前にとってかえるという内容のものだった。というのも、「農業はわれわれのごとき人民の政治の基本であり、大地、天空そして自然は、かくも多くの愛と好意とをもってそれを見守ってくれている」からである¹¹⁾。こうして採用されるにいたった、葡萄月、霜月から熱月、収穫月にいたる12の月の名称は、それらの語尾が3か月ごとに韻を揃えていることともに、「雨が降る、雨が降る、羊飼いの娘よ」の作詞者、またおそらくは18世紀後半以来の重農主義と結びついた自然への讃美を、サン＝ランベールらと共有しているはずの詩人にふさわしいものであった。だが他方で、彼らのいう《自然》には人間に恩恵をもたらすやさしい自然とともに、社会秩序の基礎となる偉大かつ崇高な自然、したがってキリスト教の神にかわって新たな崇拜の対象となりうる自然の姿が重層的に付加されている。ロムが共和国第1年のはじまる日をめぐって、太陽の運行に言及していた点についてはすでに述べた。またそれよりも以前に93年憲法の公布の式典で、エロー・ド・セシェルは「おお自然よ、1日のはじまるとき汝の姿の前に集結した、この巨大な人民は汝にふさわしい。人民は自由である。汝の胸のなか、汝の聖なる源泉にこそ、人民はその権利を見いだし再生したのだ」と呼びかけていたのだった¹²⁾。

ファール・デグランティエヌが暦を構成する名称に採用した自然の産物は、「最高存在の真の司祭、それは自然である。その神殿は宇宙である。その信仰は徳である」としてロベスピエールが提案し、ダヴィッドが計画を立案した最高存在の祭典において、催しを飾るさまざま

なシンボルとなって登場するだろう。共和暦の年末の日には古代ギリシアのオリンピアにならって競技大会を開くことが提案され、またこのころホラティウス兄弟その他の有徳の英雄を描いたダヴィッドの絵画が愛好され、さらに生まれた子どもの多くにブルトゥスなどの名がつけられもしたが、こうしたなかに現われる古代とともに、自然もまた、国王の身体をとおして可視化される体制とはことなり、本来きわめて抽象的な次元にしか存在しえない徳の共和国という制度を思念するうえでの、具体的な準拠枠としての役割を果たすことになる¹³⁾。この自然は、しかし、もはや客観的な科学の認識の対象、たとえばつい3年前には度量衡の確実な単位を提供する、普遍的でかつ不変の存在として選ばれた地球や水といった自然とは、まったく別のものに変容している。いや、改革の出発点においてはたしかに自然にもとづいて、合理的かつ客観的であることがめざされた新制度それ自体も、93年の8月に国民公会で採択された段階では、共和国の統一を実現し、その栄光を世界に広めるための手段であると理解されてしまうのだ。翻って科学技術にかかわる部分に目を戻すならば、フランスで多量の硝石が採掘できるのも、ブリウールたちによると自然がもたらした恩恵であったが、バレールは同じことを語るのに、自然が自由の母であり、自由の防衛に必要なものすべてを提供してくれると表現し、さらにジャコバン独裁の末期になると、ヴェスヴィオス山の噴火がイギリス軍に打撃を与えたのは「自由と自然の連合」の成果であるとして、「自然を模倣しようではないか。自然こそが革命を組織したのであり、またたえず世界に向けて革命を行なっているのだ」と断言するにいたるであろう¹⁴⁾。このとき彼のなかでは自然の観念さえもが、武器・火薬の製造や技術の教育と同様に《革命化》していたのである。

共和暦は時間という社会秩序の根柢にかかわる部分にまで、共和国の理念を滲透させようとする、ひとつの壮大な試みであった。しかもそれが数学者のロムと詩人のファール・デグランティーヌとの手でもたらされた、つまり科学と芸術というふたつの知識の体系をつうじて実現した点がきわめて興味深い。しかし、暦の改編にとどまらず、人名・地名の変更や服装、演劇にはじまり、国旗の制定や言語の改革（方言の絶滅）にいたるまで、徳の共和国とそのシンボルは生活世界のあらゆる領域に滲透しようとしていたのであり、そこでは共和暦におけるほど明確にはないまでも、知識がなんらかのかたちで関与していたのだった。旧来の知識人の《均衡》の精神を攻撃し、革命による芸術への活力の注入を求めたダヴィッドが、たえずそうした理念を社会に向けて放射する活動の中心にいたことはよく知られている¹⁵⁾。革命と出会うことで活力をとり戻した芸術は、逆に革命精神を昂揚させ祖国愛を鼓舞するという、重要な役割を社会のなかで果たさねばならなかった。科学技術が戦争の遂行にとって大きな貢献をなしたのと同じように。プロパガンダとしての芸術の観念にとりつかれたこの芸術家は、マラーの暗殺された姿を描くことで、一群の古代の有徳の英雄たちや球戯場の誓いに参画した人びとに加えて、さらにもうひとつの革命の英雄像を産出する。ダヴィッドはさまざまな祭典の計画に

関与し、またフランス人民の勝利を記念する巨大な記念碑を建てることを議会に提案して諒承される（93年11月）他方で、公安委員会の委嘱を受けて、古代の意匠に着想をえた市民や官吏の服装のデザインを作製するだろう（94年5月）。こうして芸術は革命の完成、徳の共和国の実現のための手段としての性格をいっそう強め、無数の政治的なシンボルが社会のなかに氾濫してゆくが、その動きがひとつの頂点に到達したのは、94年6月の最高存在の祭典においてであった。

最高存在の祭典は、その規模の点とともに、また左右の両派を切りすてて成立したロベスピエールの独裁の完成と、直後の没落にはさまれるという劇的な位置の点でも、革命期にしばしば開催された祭典のなかでとりわけきわだってみえるが、しかしわれわれの主題との関連においても、それはいくつかの重要なことがらを呈示してくれている。すでに引いたように、人間は学問や技芸については大きな進歩を遂げたものの、道徳にかんしては依然として未熟な段階にとどまっていると考えるロベスピエールは、「ある種の哲学者たちが自然の現象を説明しているさまざまな仮説は、諸君にとって何の意味があるのだろうか」と問いかけ、徳の徹底を宗教という「永遠かつ聖なる基礎」のうえにおいて実現しようとする。公教育の目的もここにしかなく、また国民が集結して举行される祭典こそは、公教育のもっとも本質的な部分を構成している。これがジャコバン派の指導者の、ほとんど最後に近くなって表明した考えであったが、すでに知識よりも徳が重要視され、その方向で進めるべく検討がはじまっていた教育が、ここでさらに実行される場所を学校から祭典へと移され、1年前にアッサンフラツが苦言を呈していたことが、まさに現実のものとなろうとしているのだ。最高存在の祭典は効用にたいする徳の完全な勝利を告げているかのようである。知識は共和国の理念に従属しなければならず、したがって「人類の大義に奉仕するにふさわしいすべての才能の持ち主」は「讃歌および市民歌唱、また祭典の美化と利益に寄与しうるあらゆる手段を用いて、祭典の設営に協力する」ことが要求される。以前から革命祭典の計画にかかわってきたダヴィッドが、今回もそのシナリオの作製にあたり、マリ＝ジョゼフ・シェニエが「最高存在の讃歌」の作詞を担当する（作曲はゴセック）ことで、芸術家が祭典という名の徳の発現と賞揚に動員され、あるいはみずからの意志でもって参加してゆく。共和暦に配置されたのと同じシンボルが、祭典のさいにも各所にちりばめられたことは先にふれたが、たとえば会場をテュイルリーからシャン＝ド＝マルスへと移すときの行列には「工芸の道具およびフランス全土の生産物で作ったトロフィー」を載せた山車が加わった。つまり現実において有用であるべき道具が、ここでは共和国の新しい神に捧げられる祭具に姿を変えたのだった¹⁶⁾。

こうして芸術を総動員し、徳の共和国の実現へとつながるはずであった祭典は、しかし、90年の全国連盟祭ほどには、国民の関心を惹きつけるにはいたらず、数週間ののちにはテルミドールの反動が到来することになる。理想の現実にたいする優先は、最高の頂点に達すること

で同時に虚の地点にまで辿りつき、その後すぐさま衰退をはじめめるのだ。ジャコバン独裁の末期における、平等主義の燃焼とそのなかへの知識の極端な吸収という点で、最高存在の祭典と共通した性格をもつのが、科学・技術の領域でのエコール・ド・マルスの開設だった。高等技術者の養成をめざすプリウールらの構想が、ロベスピエールの反対にであうことで修整されてできたこの学校は、94年の7月に全国から3000名のサン＝キュロットを集めて、3か月の予定で開校した。議会に開校を提案したバレールによると、ここでは先の武器・火薬製造技術の《革命的な教育》を受けつぎ、さらに発展させることで、祖国の防衛者の養成と青少年の革命化、技術の修得と共和国の徳の修得とが同時に進められようとしていた。学生はダヴィッドのデザインした制服を着用し、10人ごと、100人ごとに隊を構成し（またしても十進法!）、彼らがテントを張って野営するサブロン丘には軍楽が響きわたるといふ、徹底した軍隊モデルを採用した学校であった。というのも、今やあらゆる市民は共和国の兵士だからである、とバレールはいう。学生を家族から引き離して1か所に集めたのはまた、子弟は共和国という「全体的な家族 la famille générale」に所属するのであり、もはや個別の家族は否定されねばならないからでもあった¹⁷⁾。こうした発想にはルペルティエやサン＝ジュストの国民教育案が、ほぼ完全なたちで姿を現わしているとみることができる。科学と技術の有用な性格についての認識からはじまった革命的な教育は、ついに共和国の精神の最高度の追求と一体化するにいたるのだ。いうまでもなく、その開校の直後にはテルミドールが待ち受けている。10月になってギトン・ド・モルヴォーはこの学校の成果を高く評価しながらも、定められた教育期間がすぎたのであるから、学生は彼らを待つ家族のもとに戻らねばならないと述べて、いったん拒絶された家族の精神が早くも復活していることを暗示するだろう。報告者はその後も引きつづき同様の教育を実施するよう提案してはいるけれども、しかしこのときすでに中央公共事業学校の開校が決定されており、エコール・ド・マルスが存続する余地はなかった¹⁸⁾。それはジャコバン独裁期において実現した、共和国の徳と知識とを結合する最後の機会ではなかったのである。

1) *Réflexions sommaires sur l'éducation publique*, Paris, n. d. (1973), p. 6.

2) *Archives parlementaires*, t. LXX, p. 523.

3) Rapport sur la suppression de la commission des monuments, *Archives parlementaires*, t. LXXXI, p. 633.

4) Ibid., p. 633, et David, Rapport sur la suppression de la commission du Muséum, in Y. Cantarel-Besson, *La Naissance du musée du Louvre*, Paris, 1981, t. II, 213.

5) *Archives parlementaires*, t. LXVI, p. 98.

6) Instruction sur la manière d'inventier et de conserver, dans toute l'étendue de la République, tous les objets à servir aux arts, aux sciences et à l'enseignement, Paris, 1794, in B. Deloche et al. (édi.), *La Culture des Sans-culottes*, Paris, 1989, pp. 175-177.

7) L. Tuetey, *Procès-verbaux de la Commission temporaire des arts*, Paris, 1912, t. I, p. 108.

- 8) *Moniteur*, t. IV, p. 381.
- 9) Rapport sur l'ère de la République, *Archives parlementaires*, t. LXXIV, pp. 549-554.
- 10) *Nouvelle instruction...* (op. cit.), p. 33.
- 11) 前出『資料 フランス革命』462ページ。
- 12) Discours à la célébration qui a eu lieu pour l'acception de la Constitution *Moniteur*, t. XVII, p. 367.
- 13) この時期の《古代》の信仰については詳論する余裕がないが、H. T. Parker, *The Cult of Antiquity and the French Revolutionaries*, New York, 1965. その他を参照。
- 14) Rapport sur l'état actuel de la fabrication du salpêtre et de la poudre, *Moniteur*, t. XXI, p. 224.
- 15) 革命期におけるダヴィッドの活動については D. L. Dowd, *Pageant-master of the Republic, Nebraska*, 1948. およびリン・ハント『フランス革命の政治文化』（松浦義弘訳，平凡社，1989年）とりわけ第2・3章を参照せよ。
- 16) 前出『資料 フランス革命』505, 512, 516ページ。
- 17) Rapport sur l'établissement de l'Ecole de mars, *Moniteur*, t. XX, pp. 623-625.
- 18) Rapport sur l'Ecole de mars, *Moniteur*, t. XXII, pp. 311-312.

Ⅳ ロマン主義への道：テルミドール以後

「陰謀家どもは啓蒙のおよぼす影響力を恐れて、フランスから啓蒙を消滅させんと望んだが、国民公会はあらゆる力を用いて、こうした野蛮人どもの試みに対抗した。あらゆる天分の成果を注意深く保ち、圧政者どもが消し去りたいと望んだ、啓蒙された人間を追放から救いだしたのである¹⁾。」革命の状況が錯綜するなかでいったん中断していた中央公共事業学校の計画を、94年の9月になってあらためて採りあげるフルクロワは、国民公会での提案をこのような言葉でもってはじめていた。ここで「陰謀家」「野蛮人」あるいは「圧政者」とは、いうまでもなく、いましがた打倒されたばかりのロベスピエールたちをさしているものであり、のちの理工科学校はこうしたいわゆる《テルミドール派の言説》のなかで誕生したのであった。これはちょうど、先のエコール・ド・マルスが、革命精神と科学・技術の結合さらに教育自体の革命化を説く、バレールのきわめて政治的な言説をとおして開校したのと、テルミドールの事件をはさんでひとつの対照をなしている。すでにしばしばみてきたとおり、敵対する党派を野蛮人や圧政者と呼び、それにたいして啓蒙の後継者と自称することでみずからの立場の正当化を図る、そのような構造の言説は、革命期のほとんどあらゆる局面で、繰り返して展開されてきたのであり、同じ言説がテルミドール後も精確に——ただしさらに強調されてではあるが——写し取られているとしても、それ自体はもはやいかほどの関心も惹きはしないだろう。ただ、現実の問題への対処をつうじて、ついで共和国の徳との結びつきをつうじて、いずれの場合にも《有用》であることが確認されてきた知識が、新たに生じた政治状況においても受け容れられることによ

って、最終的にあたかも無傷のままであったかのように革命の混乱を脱けだし、秩序の再編とともに制度のなかへ織りこまれてゆく過程には注目しておいてよい。

前にもふれたムードンの実験施設とエコール・ド・マルスにかんする10月の報告において、プリウールとギトン・ド・モルヴォーはそれぞれ過去1年間を総括して、科学が困難な状況におかれたにもかかわらず、いかに国民の啓蒙とフランスの勝利に寄与したかを力説していたが、それらはともにまだ控えめな調子のものであった。翌年の1月にはフルクロワが、いっそうあからさまな攻撃をふくむ点で、ヴァンドリスムをめぐるグレゴワールのそれにも劣らない報告を「共和国の防衛に役立った技術について」行なっている。もとは熱心なジャコバン主義者であったはずのこの化学者は、かつてフランスにはおそるべき組織が存在して、国民を無知と野蛮のなかに沈めこみ、完全に支配することをたくらんだが、そうした試みを打ち砕いたのは、国民の代表である賢明な立法者たちであったとして、まずはテルミドール派の勝利を称揚する。革命がはじまってから学問・技芸が進歩していないという中傷を否定して、「共和国の魂はいたるところで有用な知識に訴えかける」と彼自身がつい1年あまり前に語っていた²⁾のと、攻撃と擁護の対象の置換をのぞけば、まったく同一の論理が反復されているにすぎないけれども、さらに重要なことには、テルミドールを経たのちのフルクロワによると、「陰謀からほど遠からぬところに集まった知識人や技術者」は、組織的な迫害のもとにあっても自分たちの天分を用いてこれに抵抗し、あまつさえ祖国の防衛に大きく貢献したのであり、しかもこの「知識の中心、自然科学における最高の人物の集団」から多大の成果を抽きだしたのは、ほかならぬ「旧公安委員会のうちの純粋なメンバー」なのであった³⁾。陰謀から遠からぬ場所というのがどこで、誰が純粋な公安委員であったのか、具体的な名前を挙げずともすでに明かであろう。こうしてジャコバン独裁期は、文化破壊の行為と知識人にたいする組織的な迫害の横行した悪夢の時期として、全面的に否定されると同時に、それに加担した科学者たちは、完璧に無罪であることが証明されて救出されることになるのだ。プリウールやフルクロワたちは、それまで中断していたいくつかの計画を中央公共事業学校や衛生学校などのかたちで実現に導き、18世紀の科学の知識を19世紀の社会へとつないでゆくであろう。

だが、ジャコバン独裁期の野蛮と無知が攻撃されるなかで、一方では93年から94年にかけて創設された制度や理念の否定、当時の《陰謀》によって消滅した人物の復活も進行して、時代は急激に後退をはじめることにもなる。95年憲法の審議の途次にあった8月の国民公会には、早くも商業活動における混乱を理由にして、度量衡の新制度と共和暦の撤廃、さらには団体による小売商人の規制をさえ求める請願が提出され、これに呼応した議員のひとりが、暦は廃止しないまでも、年末に余った5日間をサン＝キュロットの日と呼んでいるのをなくすること、また1年の第1日を祝うという旧来の慣習を復活させて、これを国民の「和解」のてだてとすることを提案した⁴⁾。こうした主張が即座に受け容れられるわけではなく、度量衡の統一と共

和暦とはともに新しく成立した憲法で公式に認められる（第371および372条）が、しかし、すぐ後でふれるドーナ法の国民祭典を規定した箇所に、サン＝キュロットの日を祝う祭典はもはや存在しなかった。こうして革命の後退は、政治においてと同様に知識の領域においても進行し、93年から94年にかけて成立した制度とその根柢にあった理念は、ことごとく斥けられるか、少なくとも否定的な観点で捉えられることとなる。やがては《革命》という言葉それ自体が、揶揄と非難の対象とされるだろう。「当時ひとはすぐれて興奮状態にあった。すべてが革命的に行なわれた。[……] 数学の革命的な講義、物理学の革命的な講義 [……] サン＝キュロットの子弟のための革命的な教育などなど。それが流行であり、時代精神だった。」理工科学学校のエデュカシオンを批判するバライオンは、それが最初《革命的な教育》の名称のもとではじまったことを指摘して、こんなふうに述べている⁵⁾。革命的という表現が、すぐさまブリュール自身によって《ポリテクニク》と変更されたことはすでにみてきたが、この保守派の議員のねらいは、ただ言葉のうえでの非難にとどまらず、理工科学学校にかんして、また衛生学校にかんして、ジャコバン独裁期に起源をもつ新しい教育制度を全面的に否定して、伝統的な様式での専門技術者の養成を復活させる点にあった。こうした批判にたいして反論したブリュールたちの主張が認められて、さしあたりは技術教育と医学教育のいずれについても、必ずしも専門に閉じこもることのない、広く百科全書的な内容で、しかも実践を重視する教育が引きつづき行なわれる結果となる⁶⁾が、それにしてもジャコバン独裁期のみならずそれ以前からの知識観が、ここでは革命という言葉と並んで激しい批判的になったのである。知識が共和国の徳とともに昂揚し燃焼するさまを前にして、ひとはおそらく極度に疲弊し倦んでいたにちがいない。だがそれにもまして、18世紀の普遍的で有用な知識とその拡大にかんする確信もまた、社会のなかでしだいに稀薄なものになろうとしていたのだ。

悪夢からの脱却は、それがはじまった以前の状態への回帰をもともなう。95年の10月に国民公会の最後の仕事として、ついに公教育の制度が確定したとき、その一部をなすものとして設立された国立学士院が、2年前に廃止されたアカデミーそのものの復活であるとみることは必ずしもできないだろう。ドーナの提案した公教育の計画全体が、教育にまで「馬鹿げた圧政の刻印を打つ秘訣」を求めたロベスピエールを否定して、ジャコバン派が顧みることのなかったタレイランや、とりわけ死にいたるまで国民の幸福について考えつづけた「共和国の知識人、著名かつ不幸なコンドルセ」の案に戻ったものであり、学士院の構想そしてその名称もまたふたりの発想に由来していた⁷⁾。学士院が「特殊な精神を養成し、一種の組合を構成する⁸⁾」ことを避けていた92年のコンドルセの計画の理念を継承するかぎりにおいて、ここではかつての特権団体としてのアカデミーの復活ではなく、むしろ新しい社会状況に対応した知識人集団の再編成こそがめざされたのだとみてよい。学士院が「教育のあらゆる分野を接合する」制度となるであろうとドーナがいう点には、コンドルセを経由した百科全書の影響を読み取ること

もできる。それでも、ドヌーはこの制度を「学問の教会」また「国民の神殿」と呼び、実はロベスピエールの没落の以前にはあるが、同じく学問・技芸にかかわる団体の再編成を構想したボワシー・ダン格拉斯は「地上の教育あるすべての人間の選りぬきの集合」としての学士院が「栄光の神殿」を構成すると語っていた⁹⁾のだが、合理主義者のコンドルセであればこうした表現はけっして用いなかったのではないだろうか。微妙なあたりではあるけれども、廃止されたアカデミーにとってかわるべき学術団体は、91—92年の段階よりはさらに少し後退した視野のなかで成立した。しかもその後の社会で学士院が学問・技芸の領域でさほど重要な役割を果たしたわけではなかったことをつけ加えておこう。旧アカデミーから離れた知識人の活動の中心は、理工科学校をはじめとする新しい制度のほうへ移りつつあったのだ。そして感覚・観念の分析の部会をふくみ、学士院でもっとも革新的な部分をなしていた精神・政治科学の部門も、ほどなくナポレオンの手で消滅させられてしまう運命にある。

『人間精神進歩の歴史』が議会に買いあげられて全国に配布され、92年の教育計画がドヌー法で採用されることによって、コンドルセはあらためて復権を果たし、以後「哲学と自由の著名な殉教者」（ガングネ¹⁰⁾）という像が定着してゆくが、しかしそれは一種の神話の形成ではあっても、知識の完成が人間を幸福へと導くという、あくまでも未来をめざした彼の意思を忠実に継承するものではなかった。あるいは、理工科学校その他をつうじて科学・技術の社会への普及が具体化してゆくとともに、知識の有用な性格にかんする確信そのものは、むしろさほど重要な意味をもたなくなるのだろうか。ところで、ジャコバン独裁期に不遇な状態におかれていたとされる知識人の復権は、コンドルセとは別のところではじまっていた。彼らに補償を与えることで学問・技芸の復興をはかるよう提案するのは、知識人にたいする組織的な迫害をヴァンダリスムの見逃しえない一部として告発するグレゴワールである。90年夏の議論以来アカデミーを一貫して擁護してきたこの議員によれば、「有徳の天分は自由と革命の父」であり、「有用な才能に報償を与えることは社会にたいする恩恵でもある」から、知識人の奨励にはきわめて意義がある¹¹⁾。ここでは啓蒙の拡大をめぐって以前から展開されてきた言説が、ただ繰り返されているだけであるかにみえるが、同時にまた「偉大な人物は国民の財産である」と述べて、それをフランスの栄光に結びつけ、天分とその持ち主をことさら特別なものとして賞讃するグレゴワールには、たとえばかつてのマラーや、とりわけ芸術家の奨励を文字どおりの励ましととらえ、救済政策につながる地点で提案していたバレールとは、かなり大きな差異のあることも認めざるをえない。グレゴワールの成立させた法令を受けて、シェニエが（共和暦や最高存在の祭典に關与した、あのシェニエが！）発表する奨励の対象者のリストをみると、やはりラ・アルプ、ラランド、サン＝ランベールら旧世代の人物の名前が目をひき、評価の基準は概して知識のもつ未来の可能性よりも、むしろその過去の事績に向けられているのがわかる。シェニエもまた「芸術は国民の財産であり、要求されている奨励は公の負債である」と語

り、この表現は93年憲法の第21条（「公の救済は神聖なる負債である」）を想起させるが、「公の負債」はしかし、もはや平等主義よりはむしろエリートの尊重を基礎とし、すでにその価値が充分に確められた知識人を、追認するかたちで顕彰するものでしかなかったのだ¹²⁾。

グレゴワールのヴァンダリズムにたいする一連の攻撃のなかでは、知識人の蒙ったとされる迫害に奨励が対置されていたのと並行して、文化破壊の行為には記念物の修復と保存が対をなすかたちで提起される。ジャコバン派の指導者の文化にたいする無知と敵意を子細に述べる論調は、それを裏返すならば破壊された書物や彫刻、建築に向けての、ひとつひとつをなぜまわすかのような、さもいとおしげな哀惜の念となって現われるだろう。91年のバレール以来、美術館は国民の所有物である美術品を公開することで、公教育の普及の一手段として機能することが構想されてきたのであり、臨時委員会などの手による修復と保存は、あくまでも公開・展示という前提のもとで進められてきたはずである。グレゴワールもまた、みずからを野蛮に抗する啓蒙の立場におかぎりにおいて、公教育にたいする言及をけって無視しているわけではない。だが彼の場合、有用な知識への注目よりは特別な天分の顕彰が、知識人の奨励政策を支配していたのと同様に、記念物をめぐる彼のまなざしの大部分は、知識の公開よりは保存に、さらに可能性として潜在する社会的な効用よりはすでに価値が公認された功績に向けて投げかけられることになる。ここには芸術作品がしだいに社会から独立して、それ自体で固有の価値をもつにいたる過程の兆しをみることができると同時に、「近代における記念物の崇拜」とアロイス・リーグルなら呼ぶであろう¹³⁾、そうした作品をふくむ過去の遺物すべてをこのうえなく貴重なものとみなし、ひたすらその保存に配慮を払う近代社会に特有の意識が、ヴァンダリズムにたいする告発のただなかから胚胎してくるのを確認することができるのだ。

そうしたまなざしの特徴を、また同じ時期に開設された理工科学校その他との対比をも明瞭に示しているのが、グレゴワールの提案した国立工芸院という制度である。これは過去に発明された機械や道具、その設計図などを一箇所に集めて展示することによって、技術にかんする知識を国民のあいだに普及させ、ひいては国内産業の自立をはかり、共和国の物的・精神的な繁栄を実現するというものだった。ここで彼の掲げる目的とプリウールたちが技術教育の新たな制度にこめた狙いとのあいだには、一見したところ技術教育にかんしてさほどの差異は認められないかもしれない。また、その成立のいきさつからしても、革命がはじまって以降の職業教育への関心が大きな前提になっていることは否定できない。だがなによりもまず、この制度の名称が学校 *Ecole* ではなくして *Conservatoire* となっている点に注目しよう。つまり天文台 *observatoire* が天体の運行を観察する *observer* のを目的としているのと同じく、すぐれた機械を保存する *conserver* のが工芸院の第一の使命であり、そこを訪れた者は「産業の力に結びつけることで人間の力を百倍にした発明者にたいする讃嘆の念にひたされる」のだとグレゴワールはいう¹⁴⁾。それにしても、科学的知識と技術との基本的な性格が道具としての有用性

にあり、よかれあしかれたえず未来の成果を志向しているのであれば、道具や機械が展示された場所、学校というよりは技術史博物館と呼ぶべき施設を訪れて、陳列品を産みだした天分を回顧し賞讃することに、いかほどの意味をみいだせるというのだろうか。ジャコバン独裁期の野蛮と逸脱を執拗に告発するグレゴワールは、そのはるかに以前から科学と技術に賭けられてきたことがらをほとんど理解するにはいたっていない。あるいは知識にたいする位相としては、90年の議論のさいにアカデミーを弁護したのと変わることなく、まったく後向きであるままにとどまっているのだ。工芸院の構想においてもまた、93年の否定とその悪夢からの脱却は、革命そのものの否認、さらには革命の開始する以前への回帰にさえつながら契機をはらんでいた。

ヴァンドリスムにたいする仮借ない告発と対になった記念物の保存、しかもほとんど自己目的化した保存へのグレゴワールのひたすらな意欲は、もうひとつ、のちの時代との関係でこれまた無視しえない方向を指したものだ。というのも、ジャコバン独裁期における文化破壊の《実状》を、各地からの報告にもとづいて具体的に列挙してゆくなかで、彼の関心はさまざまに残存する記念物のうちでも、とりわけ中世の歴史にかかわる事物に向けられていることが、しだいに明らかになってくるのだ。「中世の記念物は、作品の美という点ではないにせよ、歴史と年代記の点で興味深い一群をなしている¹⁵⁾」と述べるグレゴワールはすでに、そのつい直前までこの社会で展開されていた事態をまったく忘れ去っているか、さもなくば無視しているかのようである。フランス革命のはじまって以来、歴史とくに中世以来の歴史は、国王と聖職者による圧政と偽瞞にあふれた汚辱の時間でしかなく、人民はそうした歴史を完全に清算し、みずから手で再生を実現したのであり、そうであるからこそ暦まで改められ、他の多くの領域においても中世ではなしに古代が思考の参照枠として機能したはずであった。グレゴワールが痛切なまなざしをもって言及するシャルトルやアミアンの聖堂が破壊された、あるいは少なくとも無関心のうちに放置されたという状況には、その評価は別にしてキリスト教にたいする強い敵意の存在を認めなくてはならないだろう。ところが今では視点の逆流がはじまり、記念物の保存が野蛮にたいする啓蒙の使命として強調されるなかで、中世の歴史への関心がなんのためらいもなしに復活してくるのだ。いや、なんのためらいもないどころか、教会をはじめとする中世の建築物は、ことさら積極的な賞讃を受けてしかるべきものとして肯定され、しかもその賞讃は、たとえばストラスブールの聖堂の場合についてグレゴワールがいろいろ添えているように、「フランス人であることの幸福」と切り離しえないものなのであった¹⁶⁾。

知識人にたいする迫害と文化破壊の行為、さらにそれを許したとされる徳の共和国への攻撃は、価値ある人物の奨励と貴重な作品の保存をとおして、結局のところフランス国民の歴史の再発見へとゆきついてしまうことになる。グレゴワールにもっともよくみてとることのできる、こうした知識観の退嬰的な末路を実際の制度として体現したのが、95年のアレグザンドル・ルノワールによるフランス記念物館の開館であった。90年以来国有化された美術品の整理に関与

し、非キリスト教化運動が最高点に達した93年には、サン＝ドニの王室の墓を破壊から守るのに身を挺したという、あるいは当時の蛮行にたいして非力であったのを悔やみつづけたこの考古学者は、多数の墓石や彫刻作品を旧プチ＝ゾギュスタン修道院に集め、それらを時代順に配列し展示することで、その回廊をめぐればフランスの歴史の流れを理解し、また偉大な国民の栄光が体得できるように考えたのだった。ここではもはや王家の紋章や、圧政を支えた政治家の胸像は否定や攻撃、排除の対象とはならない。それらはむしろ国民の歴史につながる全体を構成することによって、革命と戦争によっていったん国民が喪失したアイデンティティの回復に大きく寄与することになるだろう。しかもルノワールによれば、「作品の収集は、生徒が記念物を眼にするわけではない、またいかなる研究発表を耳にするのでもない学校以上に、芸術の進歩にとって貴重である」のだが、ここでは革命の理念と密接な関係にあった、ルーヴル宮の開放の大きな目的のひとつであったはずの公教育にたいして、ある種の疑いなし軽視が表明されているととるのは、あまりにも敏感に読みすぎることになるだろうか¹⁷⁾。ともあれ、過去の遺物をひたすら集積し保存するこの博物館は、やがてシャトブリアンをはじめとするそれ以降の世代に中世への関心を喚起し、ロマン主義のすべてではないがかなり重要な部分の形成を助けもしたのだった。つまりそれは、理工科学校その他をつうじて展開する産業の19世紀とはまた別の、しかし裏返しの位置にある点ではけっして無関係であるわけでもない、もうひとつの19世紀が成長してゆく出発点となったのである。これが革命のはじまって以来たえず揺れ動き、ときに極端な地点にまでのぼりつめさえした、芸術と社会制度との関係の、ひとつのそしてきわめて皮肉な帰結であった。

- 1) 前出『資料 フランス革命』582ページ。
- 2) *Discours sur l'état actuel des sciences et des arts dans la République française*, Paris, n. d. (1793), p. 5.
- 3) Rapport sur les arts qui ont servi à la défense de la république, *Moniteur*, t. XXIII, p. 139.
- 4) *Moniteur*, t. XXV, pp. 471-472.
- 5) Baraillon, *op. cit.*, p. 28.
- 6) *Motion d'ordre relative au projet sur les écoles de santé*, Paris, 1797 et *Rapport sur l'Ecole polytechnique*, Paris, 1797. なお衛生学校をめぐるこのときの論争については、フーコー『臨床医学の誕生』（神谷美恵子訳、みすず書房、1969年）104—113ページに詳しい議論がある。
- 7) Rapport sur l'organisation de l'instruction publique, *Moniteur*, t. XXVI, pp. 259 et 260.
- 8) 前出『革命議会における教育計画』68ページ。
- 9) Quelques idées sur les arts, sur la nécessité de les encourager, sur les institutions qui peuvent en assurer le perfectionnement, et sur divers établissements nécessaires à l'enseignement public in Guillaume, *op. cit.*, t. III, p. 651.
- 10) *Décade philosophique*, le 20 fructidor an XIII, p. 492.
- 11) Rapport sur les encouragements et récompenses à accorder aux savants, aux gens de lettres et

- aux artistes, *Moniteur*, t. XXII, pp. 184 et 193.
- 12) *Moniteur*, t. XXIII, pp. 127, 128, 130 et 131.
- 13) A. Riegl, *Le Culte moderne des monuments*, Paris, 1984.
- 14) Rapport sur l'établissement du Conservatoire des arts et métiers, *Moniteur*, t. XXII, pp. 118-122. et Second rapport sur le Conservatoire des arts et métiers, in *L'Abbé Grégoire, évêque des lumières*, Paris, 1988, pp. 163-175. なお、工芸院の開設にいたる経緯については、D. Julia, *Les Trois couleurs du tableau noir: la Révolution*, Paris, 1981, pp. 283-309 を参照。
- 15) Rapport sur les destructions opérées par le vandalisme et les moyens de le réprimer, *Moniteur*, t. XXII, p. 90.
- 16) Second rapport sur le vandalisme, *Moniteur*, t. XXII, p. 380.
- 17) Description historique et chronologique des monuments de sculptures réunis au Musée des monuments français, in Deloche et al. *op. cit.*, p. 398. ルノワールについては D. Poulot, Alexandre Lenoir et le musée des monuments français, in P. Nora (édi.), *Les Lieux de mémoire*, t. II, Paris, 1984. を参照。

われわれが辿ってきたのは、フランス革命の展開とともに実現した、知識と社会秩序との遭遇、そして両者の相互関係の変容の過程の跡であり、それはきわめて短い期間の、したがってめまぐるしいものではあったが、しかしそのぶんきわめて激烈で、他の変化の緩慢な時代であればかえって気づくことのないような、いくつかの問題を鮮明に呈示してくれたのだった。革命はまず、18世紀の後半をつうじて社会的に有用である、あるいは有用であるべきであることが期待されてきた、知識とりわけ自然科学の知識が現実に適用されて、そうした期待がけっして誤ってはいないことを確認する場を提供した。知識が有用であるという確信は、それを特定の集団のうちに独占していた社会体制の批判や、普遍的な世界に向けて公開し拡大してゆく制度の構想につながり、これらの批判や構想は、革命期の全体ではないけれども、少なくともある時期またある部分の通奏低音をなす平等主義と個人主義に呼応するものであった。知識は革命過程の展開において無視しえない重要な道具としての役割を果たすとともに、それ自体が社会のなかで存立しうるための大きな支え、あるいは過剰なまでの活力を革命から受けとり、しかもこの知識と革命の結びつきは、政治状況が緊迫と混迷の度合を高めてゆくにつれて、ますます深いものとなる。だが、革命の理念と知識への期待がともに激しく燃焼して、ついに最高点にまで接近したとき、ふたつのものの経験する歪みは修復の余地のないほどに拡大し、知識の側についていえば、科学的知識の本来もっている客観的で実質的な性格を棄却してしまうにいたるであろう。つまり知識の有用性の徹底した追求は、まさに有用であることそのものを否定するにいたるのだ。このとき、そして政治の局面においても理念の実現が断念されて、ひとつの後退が確実に開始するとき、啓蒙の拡大そのものが停止されはしないまでも、しかしそれが現実のなかであるべき場所を賦与された出発点よりは、かなり以前の段階にまで戻されてしまう。

美術館の開設、いくつかの教育機関の設立、アカデミーの閉鎖は、いずれも知識の旧体制における独占状態から広い範囲での公開への移行を意味した。公開され現実に応用された知識は、とりわけ戦争との関係において、その社会的な価値が確認されたが、しかし共和国の徳への融合ないし従属が深まるなかで、十進法の貫徹や自然の観念の変貌にみられたように、さまざまな自己矛盾を経験せざるをえなかった。結果として知識は、市民社会のあいだに滲透することで、工業の19世紀を準備しながらも、他方では保存のための保存という倒錯した行為の対象となり、外部から遮断されみずから閉塞する国民国家の個別のアイデンティティを保证する一手段になり果ててしまうのだ。独占から公開へ、そして自立と従属のせめぎあいを経て、さらに新たなかたちの占有である保存へ——これが、フランス革命と遭遇することで知識のこうむった運命であった。ここで公開と保存とが基本的にはたがいにあい容れないことがらである点にふれておくのは、知識と社会との関係を考えるうえで、意味のないことではないだろう¹⁾。芸術であれ科学であれ、ある知識の平等な公開は、最終的な無知の解消をめざしているのだが、そのかぎりではある局面での無知による消耗や損傷、劣悪化の可能性がふくまれているからである。ここに王政にたいする敵意や非キリスト教化運動の意識が加わることで、現実には損傷がいつそう激化するのはいうまでもない。だが逆に破壊と損傷を恐れて、徹底した保存を志向するのであれば、公開は部分的にあるいは制限を設けてでしか実現しえず、したがって啓蒙の理念と切り離しえない平等への志向は否定される結果となる。知識の量の拡大と質の維持のいずれを選択するのか、この問題をめぐる位相はテルミドールをはさんで大きく転換したのだった。そしてこの転換は、啓蒙の拡大をめざす点で89年にはほとんど断絶がないのときわめて対照的である。

美術品の公開と保存との基本的な対立関係は、知識の社会的な位置をめぐる普遍志向と個別志向との対立関係といいかえることもできる。すなわちフランス革命が啓蒙の理念を継承することで開始されたかぎりにおいて、94年までは一貫して世界に向けて拡大しようとし、普遍的な価値との関係で注目を集めていた科学と芸術は、共和国がしだいに外部の世界に障壁をつくって《祖国》に変貌してゆくにつれて、むしろ個別の集団とのつながりを深めるにいたり、そのなかで特定の価値の呈示と伝達に専念するようになる。そしてこの開放から閉鎖への移行の傾向は、94年の秋以降もはや戻ることのできない決定的なものとなるのだ。政治のみならず文化の点においても、テルミドール派はジャコバン派を打倒することで、89年の革命それ自体、さらには18世紀の啓蒙の理念をも拒否してしまったのである。もっとも、そうした《反動》をよびおこしたのが、革命過程の展開とともに理想に接近し、最高度の燃焼点にまで到達した知識そのものにほかならないことは忘れてはならないだろう。はじめ社会的に有用であることをめざし、また有用であることが十分に確認された知識は、普遍性と合理主義の極度な徹底をとおして、知識の本来の性質を歪め、出発点において期待された役割をみずから放棄することにも

なった。89年に生じた白紙状態を前にして、理性は社会秩序の再編成への壮大な夢を描き、その夢はほとんど実現したけれども、しかし他方でこのうえない悪夢にも転じたのである。合理主義は、ときとして非合理的な形式によって追求されることがある。これもまた《啓蒙の弁証法》なのだ。

「大部分の知識人たちは、出来しつつある事件のたんなる観客にとどまっていた。誰も革命にたいして公然と敵対しはしなかった。何人かは革命に参加した。偉大な光景に心を動かされ、社会組織の改編のなかに、みずからの理論を応用し実現する手段を見いだしたひとびとである。彼らは革命を統御できると考えていたが、革命に引きずられてしまったのだった。」このように革命期の科学者や芸術家の辿った跡を要約しているのは、中央公共事業学校の第1期生で、のちにコレージュ・ド・フランスで数学を教え、やがて学士院の会員ともなったピオーである。事件の直後であるにもかかわらず、それを自然科学者らしく冷静かつ単純に見つめようとするこの回想は、とりわけ当時の科学者の活動を理論の現実化としてとらえている点をふくめて、彼らにたいする共感ではないまでもある種の実感をわれわれに伝えている。これまでしばしばふれてきたヴァンドリスムを告発する言説とは、大きな隔たりがここにはある。革命を導こうとしてかえって革命に足をとられたひとびとを、彼はけっして非難せずに言葉をつづけるだろう。「だが当時ひとは希望にあふれていたのだ。自由の愛が誇張でしかなく、人間をよりよくまたより幸福にするという願いが幻想にすぎないとしても、そのためにみずからの生命を代償にしたひとびとの過ちは許すことができる²⁾」と。ピオーの結論と同じく、約5年間にわたる激しい政治的動揺のなかで、科学と芸術とが辿った軌跡をみてきたわれわれの結論もまた、政治と結びついた知識がまったくの無意味なものであり、結果として破壊と反動以外のなものももたらしはしなかったというものではない。もっとも理工科学校の設立などに着目して、科学的な知識は市民のあいだに滲透して、そこからきたるべき工業の時代が準備されたことの評価をめざしたわけでないのはいうまでもないけれども。積極的にであれ消極的にであれ、すでにおきたことがらについて、結果の側から評価を下すことにはほとんど意味がないのだ。理性の夢——革命の開始とともに緊密化し拡大するが、ジャコバン独裁の成立ののちには大きな逸脱へと向い、やがてその反動を経て閉鎖的ないし後退したものに変容する知識と社会の関係、またそこで極端なかたちで呈示された両者のあいだの力学を確実に把握すること、これこそがフランス革命という時代において科学と芸術の占めた位置を検討することの、第一の目的であったのである。

1) 美術館における公開と保存の原理のあいだの矛盾について、詳しくは拙稿「美術館の誕生」(井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社、1984年所収)をみられたい。

2) *Essai sur l'histoire générale des sciences pendant la Révolution française*, Paris, 1803, p. 34.